

# 元総社蒼海遺跡群（121）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2017. 3

前橋市教育委員会

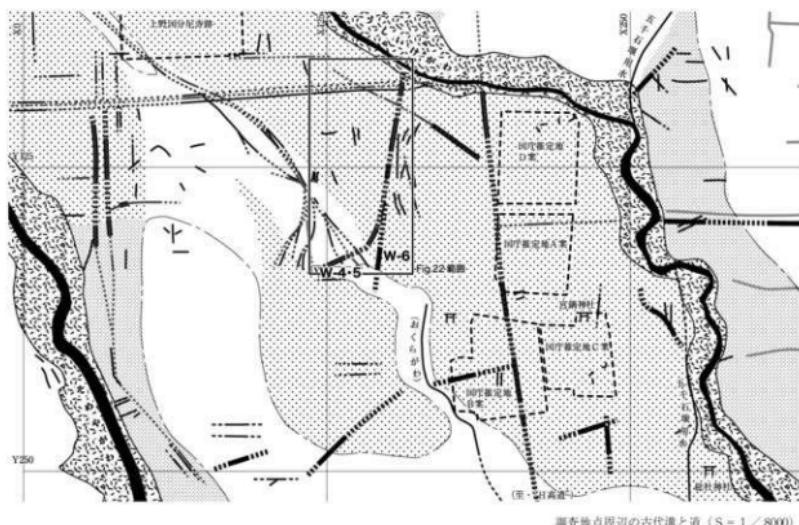






# 元総社蒼海遺跡群(121)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



2017. 3

前橋市教育委員会

#### 【解説】

下図の地形区分図は、1960 年の都市計画図を基に、周辺調査地点の基本順序の所見と、工事掘削時に現れる路頭の観察、現況地形の踏査から、中世以降に推定できる大規模な地形改変の影響を加味し、推定した。粗い網掛けは微高塹、細かい網掛けは自然堤防、不規則な網掛けは低地平野を表す。図中「おくらがわ」の記載は、川原 2011 より引用した。溝路の時期は、主に Aa-B の溝状状況と遺構の重複関係から判断した。濃色の線は溝路、淡色の線は道路状遺構と硬化面、破線は推定走向方向を表す。



W-4・5全景（南西から）



W-4 犀面と底面の状態（南西から）



W-6 遺物出土状況



W-6 全景（南から）

## はじめに

関東平野の北西部に群馬県は位置し、前橋市はその中央、上毛三山のひとつ名峰赤城を背にし、利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。豊かな自然環境にも恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、縄文時代の遺跡も、市内の随所に存在します。

古代において前橋台地は、広大な穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、律令時代になってからは総社・元総社地区に山王庵寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であったことから、横浜に至る街道は「日本のシルクロード」とも呼ばれ、横浜港からは前橋シルクの名で海外に輸出され、近代日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（121）は、上野国府推定区域や上野国分僧寺・国分尼寺などの施設を擁する古代上野国の中核地域であり、多くの注目が集まっております。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の検出・確認はかないませんでしたが、古代の溝跡、竪穴住居跡、土坑などが見つかりました。今回の調査成果をはじめとしてこれまでの調査成果の蓄積は、国府や国府のまちの姿を再現するための資料と考えております。残念ながら、現状のままでの保存が困難なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、猛暑の中、発掘調査担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成29年3月

前橋市教育委員会  
教育長 佐藤博之

## 例　　言

1 本報告書は前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（121）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名　　元総社蒼海遺跡群（121）

調査場所　　前橋市元総社町 1776-1, 1776-2, 1789-2

遺跡コード　　28 A 226

発掘・整理担当者　　中村岳彦（技研コンサル株式会社）

発掘調査期間　　平成 28 年 7 月 7 日～平成 28 年 8 月 26 日

整理・報告書作成期間　　平成 28 年 8 月 29 日～平成 29 年 3 月 24 日

3 本書の原稿執筆は I を小峰 篤（前橋市教育委員会）、VI を植崎修一郎（大妻女子大学博物館）、他を中村が担当した。

4 出土した人骨については植崎修一郎氏に鑑定して頂き、玉稿を賜った。記して感謝の意を表します。

5 発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである。

大川明子 会田義之 青木和男 畦見恒男 新井實 飯島冬子 岩田覚 上沢公一 遠藤好則 太田英明  
大竹哲夫 加藤惠子 神坂慶三 鶴田榮作 今野妙子 佐藤文江 佐復進 須藤利雄 多田ひさ子  
畠山勝利 桃口久雄 福島祐子 松島祐樹 宮澤博 森田忠子

6 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課で保管している。

7 下記の諸氏および機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

古平武夫 浅間陽 出浦崇 小此木真理 高橋清文 永井智教 野村満 山本千春 吉田智哉 日沖剛史  
南田法正 山下敬信 山下工業株式会社

## 凡　　例

1 掘国中に使用した北は座標北である。

2 掘国に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。

3 遺構名称は、住居跡：H、溝跡：W、土坑墓：DB、土坑：D、ピット：Pである。

4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構 住居跡・溝跡・土坑・ピット・その他・・・1/60 全体図・・・1/150

遺物 土器・石製品・・・1/3、1/4 金属製品・・・1/2

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。遺物の単位は cm、遺構の単位は m 表す。

6 遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下のとおりである。

遺構 焼土範囲：■ 灰範囲：■ 硬化面範囲：■ 地山：■

遺物 須恵器（還元焰）断面：■ 須恵器（酸化焰）断面：■ 研磨範囲：■

7 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間 A テフラ：1783）、As-B（浅間 B テフラ：1108）、Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：6 世紀中葉）、Hr-FA（榛名二ッ岳洪川テフラ：6 世紀初頭）、As-C（浅間 C テフラ：3 世紀後半～4 世紀中葉）

## 目 次

巻頭図版1・2

はじめに

例言・凡例・目次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	1
III	調査の方針と経過	
1	調査範囲と基本方針	7
2	調査経過	7
IV	基本層序	9
V	遺構と遺物	
(1)	堅穴住居跡	9
(2)	溝跡	11
(3)	土坑、ピット	12
(4)	土坑墓	13
(5)	埋没谷	13
(6)	遺構外出土遺物	13
VI	自然科学分析	
(1)	元社社蒼海遺跡群 (121) DB-1号土坑墓出土古代人骨	13
(2)	元社社蒼海遺跡群 (121) 出土獸骨	14
VII	発掘調査の成果と課題	26

## 挿図目次

Fig. 1	遺跡の位置	1	Fig. 13	H-1号住居跡	16
Fig. 2	周辺道路図	3	Fig. 14	H-1号住居跡②、H-2号住居跡①	17
Fig. 3	周辺調査地点とグリッド設定図	6	Fig. 15	H-2号住居跡②	18
Fig. 4	全図体	8	Fig. 16	H-3号住居跡、W-1・2号溝跡	19
Fig. 5	基本層序	9	Fig. 17	W-3・4・6号溝跡、1号谷	20
Fig. 6	DB-1号土坑墓人骨出土状況(南から)	14	Fig. 18	W-4・5号溝跡、1号谷	21
Fig. 7	W-3号溝跡出土馬骨: No.1・右腕骨背後面観	15	Fig. 19	土坑、土坑墓、ピット	22
Fig. 8	W-3号溝跡出土馬骨: No.2・左上腕骨前面観	15	Fig. 20	H-1・2号住居跡、W-4・5号溝跡、DB-1号土坑墓	22
Fig. 9	W-3号溝跡出土馬骨出土部位置	15		出土遺物	23
Fig. 10	W-4号溝跡出土ウシ(牛)出土部位置	15	Fig. 21	W-6号溝跡、1号谷、遺構外出土遺物	24
Fig. 11	W-4号溝跡狀骨出土状況	15	Fig. 22	W-4・6号溝跡と周辺調査例	27
Fig. 12	W-4号溝跡出土ウシ(牛)右下顎骨	15			

## 表目次

Tah. 1	周辺道路一覧表	4	Tah. 4	出土遺物觀察表	24
Tah. 2	隣接調査地点の基本層序	8	Tah. 5	関連溝跡一覧	26
Tah. 3	元社社蒼海遺跡群(121) 土坑、ピット計測表	12			

## 写真図版目次

PL. 1	西側調査区全景(西から) 東側調査区全景(北西から)	
PL. 2	H-1全景(西から) H-1カマド全景(西から) H-1棚状施設全景(北西から) H-1貯蔵穴全景(西から) H-1カマド周辺部全景(西から) H-1カマド掘り方全景(西から) H-2全景(北から) H-2カマド全景(西から)	
PL. 3	H-2貯蔵穴全景(西から) H-2掘り方全景(北から) H-2カマド掘り方全景(西から) H-3全景(西から) H-3カマド全景(西から) W-3全景(北西から) W-3歎骨No.1~3出土状況(南西から) W-4全景(北東から)	
PL. 4	W-4・5間の遺構接合状況 土壙状に地山が残る(南東から) W-5全景(南西から) W-6遺物出土状況(南から) DB-1遺物・人骨出土状況(南西から) 1号谷歎骨No.1~3出土状況(北西から) 1号谷歎骨No.3~7出土状況(南東から) 調査風景(北から)	
PL. 5	遺物写真	

## 引用・参考文献

秋本太郎 2008 「戦国城郭の遺物」『後北条氏の城・合戦と文政』、博物館周辺文化財の複合的活用事業実行委員会  
阿久留智和 2016 「上野国府を探して~前橋市元祖社町における発掘調査成果を中心として~」『発掘された古代の技術~最終的な発掘調査をからみた上野・北武藏の歴史社会~』、伊勢崎市教育委員会

五十嵐信哉 2006 「考古資料の岩石学」、パリノ・サーヴェイ株式会社

江口洋 2014 「地方官吏」「古代官吏」「古代官吏」考古調査ハンドブック 11 ニューサイエンス社

JCHO 2015 「古代武藏国府の成立と変遷」 同成社

川原泰久 2011 「上野国府」 第1章、前編

木下卓一 「古代日本の河川敷直」、同成社

木泽哲明 1988 「第3回 史の環」 第1回 「闇道遺跡」「上野国分寺跡・尼寺中興地盤 (3)」、群馬県歴史文化財調査委員会

木澤哲明 2006 「築をくつむる建物の研究」、六書房

群馬県歴史文化財調査事業団 1997 「出土した古代の土器、展示レポート」

群馬県歴史文化財調査事業団 2007 「(社)関東光明院N遺跡、元祖社牛込川遺跡、元祖社小見内遺跡」

小森聰 2004 「草から土に土器の礎石の研究」、日本建築の土器様式の成立と展開、7~19世紀~、京都叢書刊行

沼澤義典 「「鉄砲街跡の研究」、群馬郡元祖社町の研究」、(昭和年版)

坂口一 2013 「第1章 古墳時代の自然災害と遺跡、椎名古の丸の災害 (P&A)」、「自然災害と考古学」、群馬県歴史文化財調査委員会

坂口一・三浦景子 「奈良・平安時代の土器の風貌と住民の生活と併せて問題に」とし都型式瓶形の検討~「群馬県史研究」24 群馬県史編さん委員会

坂本和慶 2015 「古墳時代窯場の土器を使わない製陶と磁の流通脈路」、「埼玉考古」第50号 埼玉考古学会

坂本和慶 1991 「7世紀代以降の土器細部の規則とその要因について~群馬盆地を中心として~」、「群馬考古学手帳」Vol.2 群馬土器研究会

坂本和慶 2006 「古墳時代窯場について~上野施設の生産と流通~」、「高崎市史研究」第17号 高崎市史研究さん専門委員会

坂本和慶 1988 「古代の武藏における土器施設の調査」、「土器考古」第7号 土器考古学会研究会

坂本和慶 1983 「いわゆる北武藏系土器群の動態~古代武藏国における土器生産と交易~」、土器考古学研究会

早田忠 1990 「第一回 第五回 前橋台地と上野川盆地」、「群馬史研究」通巻解説、原始古代~群馬県

早田忠 2000 「[53]関東平野西北部・山間・山麓部を流れる河川流域に見られる地形変化」(1)火山活動の影響を受けた利根川扇状地の地形」、「関東・伊豆小笠原」日本の地形 東京大学出版会

高橋信一・大津洋一 2015 「古の里土人門」、全国農村教育協会

田中伸 2004 「関東にける土器と地質」、「近畿土器の基礎研究XVIII 中世土器研究の今日的課題~土器編と中世史研究~」、日本中世土器研究会

谷口信重・井上隆司 2004 「考古学のための小土器叢文マニアル」、学生社

都丸一九四一 1947 「玄蕃岩屋跡調査~江戸初期の利根川舟~」、「群馬國史文化研究所

中村千賀 2007 「群馬・茨城の大地から世界の歴史に進む」、石橋社

金井正和 2004 「古の官道とアプローチの大地から世界の歴史に進む」、「道筋」

日沖謙 2016 「群馬県祖先が元祖社地域に付ける地の形態と土器地図」、「地域考古学」1号 地域考古学研究会

東日本歴史文化財研究会・山梨県立考古学館 1998 「古文・水道遺跡を考え~人気古文とどのようにつきあってきたか~」第7回東日本歴史文化財研究会

深澤理幸 2016 「古代の國境の成り」、「所と郷郷との森海舟記紀」第25号、所と郷郷の森海舟記

深澤理幸 2016 「開拓のアプローチ」、根張作業に付する土器~古文・武藏国境の復元~、「所と郷郷の森海舟記紀」第29号、所と郷郷の森海舟記

有田中郷の森海舟記 2016 「群馬が古文・武藏国境」、所と郷郷の森海舟記アラート17

有田中郷の森海舟記 2017 「所と郷郷一平成22年度報告」

前橋市教育委員会 2013 「確定上野国一平成24年度調査報告」

前橋市教育委員会 2014 「元祖社牛込川跡群 (57)・元祖社牛込川遺跡群 (56)・元祖社牛込川跡群 (59)」

前橋市教育委員会 2015 「確定上野国一平成25年度調査報告」

前橋市教育委員会 2016 「確定上野国一平成26年度調査報告」

前橋市教育委員会 2018 「元祖社牛込川跡群 (100)・(101)」

前橋市教育委員会 2018 「元祖社牛込川跡群 (117)・元祖社牛込川跡群 (118)」

前橋市教育委員会 2019 「元祖社牛込川跡群 (120)」

前橋市教育委員会 2019 「元祖社牛込川跡群 (93番地)」

前橋市教育委員会 2020 「元祖社牛込川跡群」

前橋市歴史文化財調査委員会 2001 「(元祖社)見内川遺跡」

前橋市歴史文化財調査委員会 2003 「(元祖社)見内川遺跡 元祖社小見内遺跡」

前橋市歴史文化財調査委員会 2006 「(元祖社)牛込川遺跡群 (1)」

前橋市歴史文化財調査委員会 2006 「(元祖社)牛込川遺跡群 (6)」

前橋市歴史文化財調査委員会 2006 「(元祖社)牛込川遺跡群 (7)」

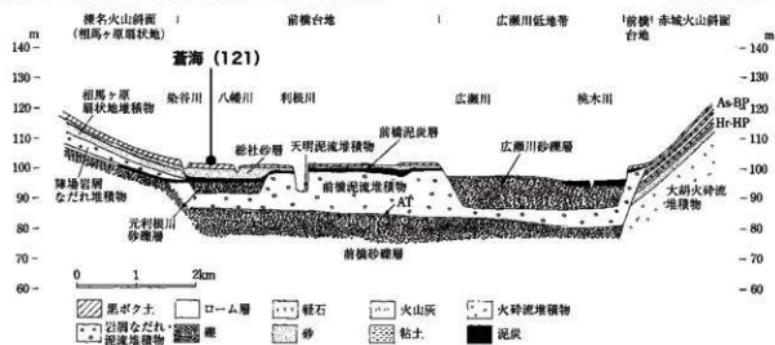
前橋市歴史文化財調査委員会 2008 「(元祖社)牛込川遺跡群 (17)」

松田義夫・野井大輔 1971 「第一回 第三回 自然の変遷」、「廢帝宮古」第一卷 前橋古

山野井徹 「日本の土・地質学が明かす土と構文文化」、筆者著

渡瀬弘 2000 「矢掛岩用水をめぐる町村」、「群馬文化」264 群馬県地文化研究議論会

※ 主要な文献以外は削除した。



付図 高崎市棟高町~高崎市街地へて前橋市荒口町に至る利根川扇状地の地質断面と遺跡の位置  
(早田 1990 一部加筆)

## I 調査に至る経緯

平成28年5月9日付けで前橋市長 山本 龍（区画整理課）より元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に発掘調査を実施中であり、市教委直営による発掘調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務委託することで依頼者である前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。平成28年6月20日付けで前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（121）」（遺跡コード：28A226）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、（121）は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。



Fig. 1 遺跡の位置

## II 遺跡の位置と環境

**遺跡の位置**（Fig. 1・2、付図） 元総社町は、前橋市の南西部に位置し、元総社蒼海遺跡群は、その北西域を占める。利根川を越えて約3km東には群馬県庁をのぞみ、南約2kmには本市の玄関口である前橋インターチェンジが所在する。遺跡地は1960年代まで主に畑地だったが、前橋市街地から広がる開発の波は元総社町にもおよび、蒼海遺跡群の東部と南部は宅地化が進んできた。さらに近年では、前橋-安中-富岡を結ぶ西毛広域幹線道路を中軸とする、元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって、市街地はさらに拡大しつつあり、遺跡地の周辺は今日、新旧の景観が混濁した過渡的な様相の中にある。

遺跡地は、榛名山南東麓に伸びる相馬ヶ原扇状地と前橋台地の移行地帯にあり、牛池川と染谷川の合流点で画された、南北に長い台地上に立地する。約2万年前、浅間山は山体崩落を起こし、前橋泥流が生じた。十数メートルも堆積した泥流層は前橋台地の母体となり、その表層には川が流れた。この頃の元利根川は、現利根川よりも西側の總社や元総社の辺りを流れていると考えられている（早田1990）。約1.7万年前、榛名山の山体崩落によって陣場岩屑などが発生し、その堆積物が相馬ヶ原扇状地の母体となった。約1.4～1.3万年前を前後する頃には前橋泥炭層が形成され、遺跡地の周辺は針葉樹林や草本類が繁茂する環境下にあったと考えられている（早田2000）。相馬ヶ原扇状地を水源とする染谷川・牛池川・八幡川などの中小河川は榛名山の裾野を南東へ流れるが、元利根川が残した低地の影響を受け、ちょうど遺跡地の辺りで流れを大きく南へ変える。急激な流れの変化は洪水の温床となり、度重なる洪水層が堆積した結果、遺跡地の周辺には約2.5mの深さにも及ぶ總社砂層が形成されたと考えられている（日沖2016）。總社砂層の堆積と中小河川の開析作用の反復は、わずかな高台と低地を残しつつ台地を形成した。台地が安定すると、中小河川の流れも現在の場所に落ち置いて、今日に至るまで下刻を続けている。台地の上部には黒ボク土が形成され、歴史時代に起きた度重なる火山災害や人為的な

地形改变の累積を経て、台地表層は次第に平坦化してきたと推測できる。

**歴史的環境** (Fig. 2・3, Tab. 1) 紙数の都合上、国府周辺地域を見据えた広域的な叙述は既存の報告書にたのみ、ここでは、本遺跡の様相に合わせて地域を限定し、記載する。

総社砂層より上層で確認される最も古い遺構は現在のところ、縄文時代前期に遡る。遺構の覆土には黒ボク土が混ざることから、台地上に黒ボク土が形成されたのは、この頃と考えられる。該期の住居跡は、蒼海遺跡群（3・4・13・40・41※以下「蒼海」）・小見V～VII遺跡などで確認され、現状では、染谷川左岸の自然堤防に沿って帶状に分布する。続く中期の住居跡は、蒼海（3・40）・小見内VII遺跡などに確認される。蒼海（10）を除くこの一帯は、染谷川自然堤防の北端と、榛名山南東麓の最末端にあたり、緩やかな南斜面で、広い微高地を面的に確保できる地帯である。後期～晩期の遺構は少ないが蒼海（10・101）に確認され、遺物は蒼海（100）・小見V遺跡などにも確認される。中期からの微高地上に加え、台地内の谷地に立地する蒼海（101）にも、この時期の遺構が分布する。小見V遺跡は染谷川、蒼海（10・100）は牛池川の低地に立地し、蒼海（101）に隣接する本遺跡では、わずかながら前期の土器片が出土した。

弥生時代の遺構は少ないが、前期末～後期の遺物は、蒼海（37・39・61）・小見内III遺跡などで出土しており、現状の分布は台地の北端をなす牛池川右岸の一帯に集中する。牛池川の低地平野を北に望む立地だが、低地内の元総社北川遺跡や元総社牛池川遺跡では、遺物は出土するものの、水田跡などの生産域は確認されていない。

古墳時代前期の遺構は、ひとつには蒼海（38・39・17街区）・小見内III遺跡のように、弥生時代後期の分布を踏襲する。また、蒼海（40・48）・小見V遺跡など染谷川の自然堤防上と、蒼海（38・56・61）など牛池川左岸の一帯にも住居跡が分布する。牛池川左岸の一帯では集落域のほか、低地平野に立地する閑泉明神北IV・V遺跡で水田跡が確認され、蒼海（62・81・100）などには周溝墓と推定される溝跡が確認されており、該期における集落域・生産域・墓域を含む、一体的な生活の単位が確認されつつある。中期になると、牛池川の一帯では左岸を中心に遺跡が分布し、蒼海（35・81・91）・甲種荷大道西II遺跡・元総社中学校遺跡などで、多くの住居跡が確認される。元総社北川遺跡・閑泉明神北IV・V遺跡など、低地内の遺跡ではHr-FA洪水層に覆われた小区画水田跡が確認されており、この頃までには、牛池川低地平野の広い範囲が生産域として開拓されていたと推測できる。後期になると遺跡が増え、蒼海遺跡群のほぼ全域で住居跡が確認されている。しかしながら該期の古墳は確認されておらず、蒼海（10・23・28）などでは埴輪片が出土した程度である。やや離れて約1km東に稲荷山古墳〔43〕が位置し、直径約30m程度の円墳で、6世紀後半頃の築造と考えられている。7世紀になると、約2km北に、総社古墳群を代表する愛宕山古墳〔ロ〕・宝塔山古墳〔ハ〕・蛇穴山古墳〔ニ〕の大型方墳や山王魔寺〔ホ〕が建立されて、政治的中枢を形成する。本遺跡の周辺では、蒼海（9・10・35）で、建物の方向が一定の規則性を示す、大規模な掘立柱建物跡群が確認されている。7世紀の住居跡は、周辺に広く分布するが、前段階に比べると減少し、現状では数軒単位の小規模な群構成が点在するよう見える。本遺跡では、該期に開削された大規模な溝跡と住居跡を調査した。

奈良時代、本遺跡の周辺は推定上野国府域にあたり、国府の位置にはA～Dの4案が推定されている。その内、宮鍋神社南面の国府C案推定地やその周辺では、蒼海（99）・上野国府等範囲内容確認調査28・33・34トレンチで掘込地業をもつ建物跡が確認され、蒼海（95）では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。一方、この城内では8世紀後半から9世紀末葉まで、現状で住居跡は確認されていない。国府域の特徴は周辺遺跡の出土遺物にも反映され、内面に放射状暗文を施す土器飾暗文坏や、須恵器盤・高盤の出土率は他の地域に比べて高く、蒼海（22・40・41）・小見VI遺跡など30地点以上に出土例があり、蒼海（13・41）では三彩陶器、蒼海（1・38・40）では腰帶具、蒼海（26・60）では円面鏡なども該期の遺構から出土している。本遺跡では、前から続く大規模な溝跡を調査した。

平安時代になると、前代にも増して、各遺跡に中小規模の住居跡が数多く確認される。国府や曹司によって構

成される国衙、国司館や市・津、それらの機能を支えた衛丁が一時滞留する宿所の集落など、上野国府域の空間構成の検討は、歴史地理学的な手法によるところが大きかったが、近年では発掘調査の進展によって、城内における地点ごとの考古学的な差異が、おぼろげながら把握されつつある。例えば、国府域の北西端で国分僧寺・尼寺にも近い、蒼海（26・40・41）、小見II遺跡などには、住居跡が高い密度で分布する。この地点は、腰帶具・円面鏡の出土率が高く、鉄鉢形土器・三足盤・金の付着した灰釉陶器などの特徴的な遺物や、「大館」「市」「金」などの墨書き器が出土している。また、国府域の西端にあたる染谷川左岸の自然堤防上は、綠釉陶器の出土が多い国府域の中でも、特に高い出土率を示す一帯で、蒼海（8・13）では合計49点もの破片が出土している。なお、国府域の北東端にあたる牛池川右岸の蒼海（37・39・53）などでも、特に多くの住居跡が確認され、馬具・小札・刀装具・鉄鎌など武器・武具の出土が目立つ。国府に関連すると考えられる区画溝は、蒼海（2・7・9・13・36・58）、閑泉橋遺跡などで確認されている。本遺跡では、該期に再掘削された大規模な溝跡を調査した。平安時代中期、国府域は平将門の乱の舞台となった。将門は天慶2年（939年）に国衙を攻略するが、これに関わる考古資料は、現在のところ確認されていない。

国府域の空間構成復元を困難としている要因の一つとして、蒼海城〔i〕の大規模な地形改変がある。国府推定地内に位置する、蒼海（23・29・65）などでは蒼海城中枢部の堀跡群が、蒼海（21）では、二の丸に展開する無数の柱穴群が確認され、その帰属時期は15世紀を中心とする。蒼海城に関連する遺物としては、蒼海（23・25）で、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋、袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。室町時代、関東管領を世襲する上野國守護の上杉氏より、守護代に任命された總社長尾氏は、往時に「總社城」と呼ばれたこの城を本拠とした。

慶長6年（1601年）、秋元長朝が總社領主になると蒼海城は廃城となり、總社城〔ii〕が築城された。長朝は戦乱で荒廃した總社領を復興するために灌漑体系の整備を行い、天狗岩用水〔a〕を開削した。天狗岩用水を基幹とする水路網の整備によって領内の新田開発は進み、六千石程度だった石高は、開削が成った慶長9年（1604年）頃には、一万石に達したと言われる。天狗岩用水の水路網は、五千石堰用水〔b〕や小笠原堰用水〔c〕によって補われるが、これらの用水路は一方で、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする午王頭川や八幡川の中小河川から取水し、現利根川から取水する天狗岩用水とは、異なる灌漑体系をもつ。その開削の時期は天狗岩用水を巡る可能性が指摘されており、上野國神名帳に残る「小笠原溝口明神」の記載は、小笠原堰用水を示すと考えら



Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表



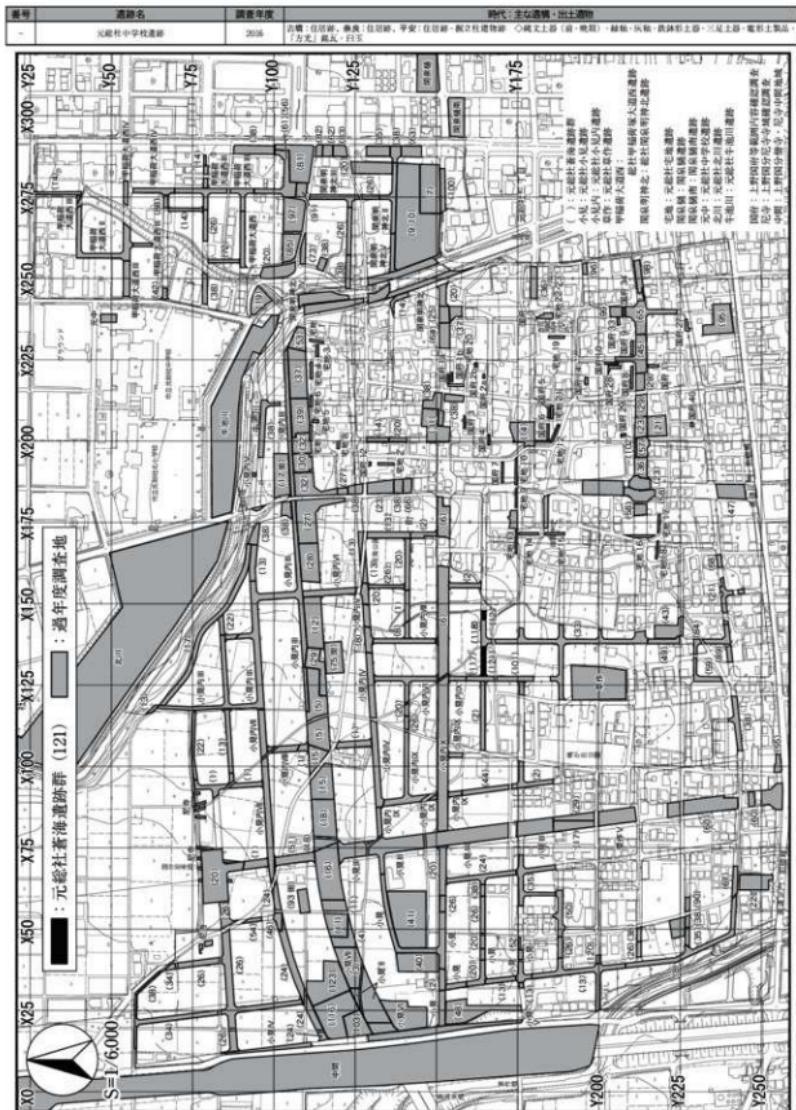


Fig. 3 周辺調査地点とグリッド設定図

かれている（都丸 1943、近藤【出版年不詳】）。また、つい最近暗渠化してしまったが、五千石堰用水の左岸にあたる甲稻荷塚大道西遺跡の A 区では、五千石堰用水と同一方向に流下する、11 世紀以前に埋没した大規模な溝跡が確認されている。

### III 調査の方針と経過

#### 1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業の道路予定地であり、調査面積は、247 m<sup>2</sup>である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000、Y = - 72200.000を基点とする4 mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系）
X 135、Y 165	X = 43340.000 m、Y = - 71660.000 m	X = 43694.9094 m、Y = - 71951.7596 m

発掘調査は、遺構確認面まで重機（0.25 m<sup>3</sup>級バックホウ）を用いて表土を除去した。東側調査区は、盛土造成地である現地表面から遺構確認面までの深さが2 m以上に達したため、安全帯を設けた。表土除去はAs-B混入土層の下層までを目安とし、As-C混入黒色土層～黒ボク土層を遺構確認面とした。遺構確認面は、ジョレンを用いて精査し、平面的な土質の観察によって遺構を判断した。遺構の重複や土質の類似によって、判断ができない場合は、調査に先行してサブトレーンチを下層まで掘り、その底面と土層断面の観察により、遺構を判断した。確認した遺構は、土層を記録するために土層断面を残しつつ覆土を除去した。遺構に伴うと判断した遺物は、出土位置を記録した上で取り上げた。

遺構の図面記録は、断面図・平面図・遺物の出土位置について、トータルステーション・電子平板を用い、オルソフォトを用いた写真測量も多用した。写真記録は、土層断面・完掘状況・遺物出土状況に対し、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（Canon EOS55・EF28-105mm/ACROS・ISO100/PROVIA・ISO100）とデジタルカメラ（Canon EOS50D・EFS18-135mm）を用い、基本的に絞り値f 8～11・広角端で撮影を行った。

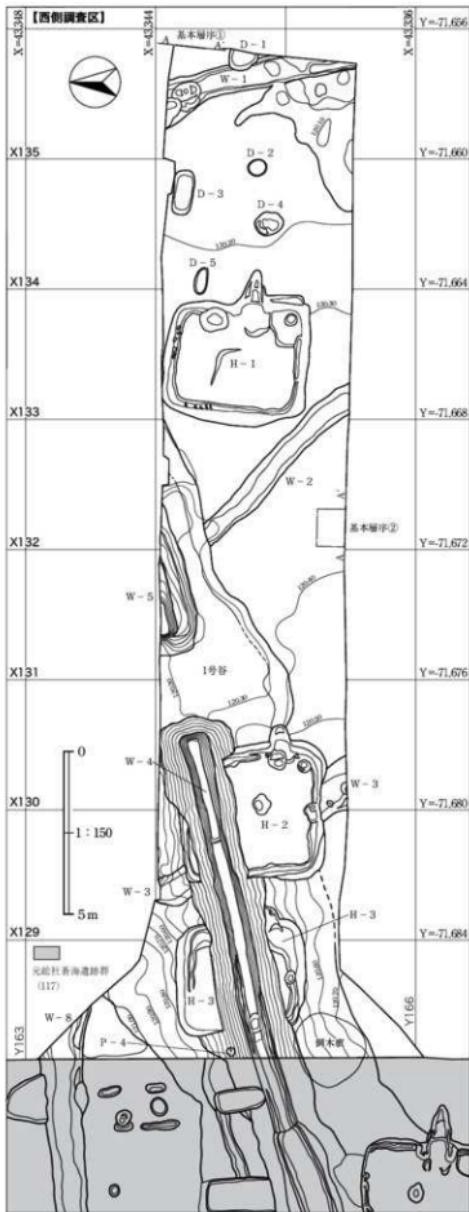
報告書の作成に際しては、DTPの手法を用いた。遺構図については、原図の作図から報告書掲載の編集図に至るまで一貫してデジタルデータを用い、遺物図については、手測りでの原図作成後デジタルトレースを行った。遺物写真的撮影にはデジタルカメラ（Canon EOS 5 D/EF200mmL）を用いた。データ化されたこれらの調査記録を、レイアウトソフトを用いて組版し、刊行した。

#### 2 調査経過

平成28年6月21日に市教委・区画整理課・技研の三者で事前打ち合わせを行い、発掘調査は7月7日から開始した。先行して畠土の搬出や、周辺の安全対策を行った上で、8日から表土除去を行い、並行して遺構確認や基本層序の確認を進めた。遺構調査は翌9日から始めた。個々の遺構調査に並行しながら終始、猛暑の中で深い溝跡を掘り続ける重労働が続いたが、調査地に残る既設水道の借用など、地域の方々の協力を得て、28日にはほぼ全ての調査を終え、翌29日に調査区の全景写真を撮影した。同日中に、市教委による西側調査区の終了確認が行われ、その後、残務と撤収作業を行い、8月1日に西側調査区の調査を終えた。

区画整理事業に伴う工事による中断期間を挟み、8月18日から、東側調査区の表土除去を行った。並行して遺構確認を進め、翌19日から個々の遺構調査を始めた。23日、前日の台風によって調査区壁が崩落。碎石混じりの土砂を人手で搬出し、調査を再開。25日には全ての調査を終え、調査区の全景写真を撮影した。同日中に、市教委による東側調査区の終了確認が行われ、その後、撤収作業を行い、26日に東側調査区の調査を終えた。

整理作業は、平成28年8月29日から着手した。9月9日に遺物の洗浄と注記を、30日に遺構図面の編集作業を終えた。10月4日に出土遺物の分類と報告対象の抽出を終え、観察と実測を始めた。14日に遺構図面の版下が完成。原稿執筆と組版は17日から行った。11月24日に遺物図面の版下が完成。12月12日に出土遺物の写真撮影を終え、24日に写真図版の版下が完成した。1月30日には原稿執筆と組版を終了。市教委による査読の後、2月20日に上稿した。3月24日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

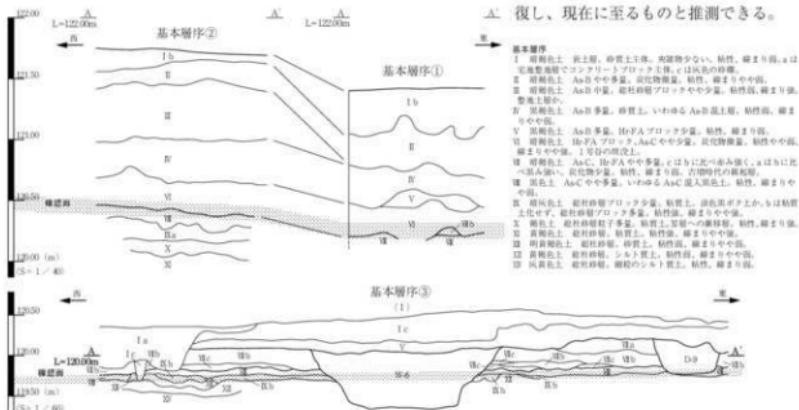


## IV 基本層序

調査以前の西側調査区は畠地であった。表土直下は As-B 混入土層のⅡ～Ⅳ層で、堆積は厚いため、現代の耕作による遺構への影響は弱い。Ⅵ層は 1 号谷の埋没土上層に相当し、9 ～ 11 世紀の遺物を少量包含するが、調査区のほぼ全域に堆積し、これ以前の遺構を覆い隠しているため、調査では包含層として面的に除去した。結果として、その直下の As-C 混入黒色土層であるⅦ層を遺構確認面とした。Ⅸa 層は多湿の黒ボク土で黒味がやや淡い。X 層は総社砂層の漸移層が粘質化した層で、粘質化は総社砂層最上層の XI 層まで観察できる。隣接調査地点の基本層序における、このような多湿土壤の分布も鑑みると、該期には、水はけの悪い台地内の谷地が北西から南東方向に形成されており、西側調査区は、その中に位置していると推測できる。

調査以前の東側調査区は宅地であった。コンクリートブロックの碎石を混ぜた造成土の I 層が 1 m 以上も盛土され、さらに調査区西半の大部分が、同質の造成土を含む大きな擾乱によって破壊されていた。西側調査区と異なり VI 層は確認できず、Hr-FA を含むⅦ層が堆積する。Ⅷ層は炭化物の細片を含み、しまりは弱く、細分層が互層を成し、W-6 に掘り込まれていることから、古墳時代の耕起層と判断できる。遺構確認面は理論上、この耕起層の直上にあたるが、Ⅸ層と遺構覆土の土質は類似しており、確認は困難だったため、直下のⅧ～X 層を実質的な確認面とした。多湿土壤の IX a～XI 層は確認できず、湿性のやや弱い IX b・XI 层がこれに相当しており、東側調査区は、先述した台地内に形成された谷地の、外縁に位置していると推測できる。

周辺調査地点を含めた層序の比高差から、調査地点周辺は本来的に、総社砂層の堆積により形成された南東へ下る緩傾斜地と、その台地上を北西から南東方向へ開析する緩やかな谷地形から成り、W-4・5 の開削後は、その埋没過程で一時に東西方向へ浅く谷地化するが、As-B 混入土層が形成される頃には本来の地形傾斜に回復する。



## V 遺構と遺物

### (1) 穴穴住居跡

H-1 号住居跡 (Fig. 13・14・20, PL. 2・5)

位置 X 134・135, Y 164・165 主軸方向 E-6°-S 規模 東西軸 482 m・南北軸 450 m・深さ 0.57 m 面積 16.85 m<sup>2</sup> 覆土 最上層は As-B をわずかに含む。以下の覆土は Hr-FA や As-C を含む。土坑 1 は覆土下層から掘り込まれており、カマド崩落土の裾を切る。床面 貼床で、竪穴部の中央から北西壁際に、ややしま

りの強い硬化面。重複 直接的な重複はないが、上位は1号谷の埋没土が被覆する。カマド 東壁のやや南寄りで確認。全長(2.01)m・燃焼室内幅不明・煙道内幅0.24m。19・20層は白色粘土を多く含むことから袖構築土の可能性を考えたが、平面的な広がりではなく、明確な袖部は確認できない。火床面から推定できる燃焼室の、左奥手から出土した砂岩は、円柱状に加工された被熱が顕著で、小穴に据えられており、支脚の基部と判断できる。焚口部は内幅0.44mで、構築材の据え穴と判断できる小穴が左右一対確認でき、左袖の据え穴には袖構築材の砂岩が残る。燃焼室と煙道部の境は有段で、燃焼室よりも一段高い煙道の底面は、緩やかに傾斜しながら煙出し部にかけて立ち上がる。煙道部の壁面は良く焼けている。燃焼室の掘り方は、方形に掘り込まれる。貯蔵穴 堅穴部南東隅で確認。長軸1.14m・短軸0.98m・深さ0.45m。不整形で浅い掘り込みの南東隅にP1が付属する。同時に隣接する蒼海(117)H-1では、貯蔵穴内のピットに長胴甕が正位で安置されており、これに類似した構造が推定できる。掘り方には近接してP2が確認できる。P1と同規模であり、蒼海(117)H-1の例を参照すると、P1以前の長胴甕の据え穴の可能性がある。P2の中には破損したカマド構築材と判断できる砂岩の岩片が流入しており、これらの状況から間接的に、カマド燃焼室と貯蔵穴の造り直しが推測できる。

柱穴 確認できず。壁周溝 ほぼ全周で確認できるが、貯蔵穴の周囲は途切れる。棚状施設 床面から0.42mの高さに、幅1.15m・奥行0.23mの棚状施設が確認できる。底面は堅穴部に向かって緩く下り、硬化面は確認できない。カマド右側の堅穴部壁面上部の地山を掘り込んで構築され、桐生分類「ARアウトタイプ・素掘り」に相当する(桐生2005)。棚上や棚下から遺物は出土しなかった。掘り方 堅穴部の南西部が、不整形で一段低く窪む。その底面は粘質土化した総社砂層であるXI層に達しており、堅穴部の掘削を利用して、粘質土を採土した可能性がある。出土遺物 床面直上やカマド内から良好な遺物の出土はなかった。覆土下層から出土した3は、いわゆる北武藏型坏で、口縁部はやや強く内屈する。覆土中～上層からは1・2・4～6が出土。1の蓋はカエリをもち、口径がやや大きい。2の坏は平城宮分類「坏G」に相当する。4はいわゆる北武藏型坏で、3に比べ口径が大きく、口縁部は緩く直立し、外面は口縁部と底部の間に最終調整の無調整帯が残る。5の皿は、わずかだが胎土に結晶片岩の細片を含み、藤岡産の可能性がある。6は「房州石」と呼ばれる貝果穴痕軟質泥岩で、被熱している。図示した土器のうち、2と3はやや古相、1と4はやや新相を示す。9の刀子はカマドの掘り方から出土した。時期 出土遺物から、7世紀後半～8世紀前半と推定する。

#### H-2号住居跡 (Fig.14・15・20, PL. 2・3・5)

位置 X 130・131, Y 164・165 主軸方向 E - 4° - N 規模 東西軸4.82m・南北軸4.64m・深さ0.45m 面積 18.55 m<sup>2</sup> 覆土 上層の1・2層は1号谷の覆土。以下の覆土はHr-FAやAs-Cを含む。床面 貼床で、堅穴部の北東部に、ややしまりの強い硬化面。土坑1は覆土中層から掘り込まれ、貼床を破壊している。重複W-3・4、1号谷と重複。新旧関係は本遺構→W-4→1号谷→W-3。カマド 東壁の南寄りで確認。全長(2.76)m・燃焼室内幅不明・煙道内幅0.67m。袖部は残存せず、破損したカマド構築材と判断できる砂岩や長胴甕が、床面直上～カマド崩落土最下層にかけて散乱する。ただし底面には、浅い掘り込みと支脚の基部や火床面が残存している。断面の観察では、新旧2面の使用面が確認できた。煙道部は短く、煙出し部は強い傾斜角で立ち上がり、壁面は良く焼けている。掘り方は、一回り大きい土坑状に掘り込まれている。貯蔵穴 北東隅部に床面を掘り込むピットが確認でき、構築位置から貯蔵穴と判断した。長軸0.39m・短軸0.37m・深さ0.29m。上端に広く浅い段は付かないが、同時に隣接する蒼海(117)H-1の例を参照すると、長胴甕の据え穴の可能性がある。柱穴 確認できず。壁周溝 全周で確認できる。掘り方 わずかな起伏が観察できるが、全体的には平坦で浅い。底面はX層。出土遺物 1の模倣坏は、床面直上から出土したが小片で、図示したほかの土器よりも古相を示す。カマド内から出土した3・4の長胴甕は、口縁部に最大径をもつが「くの字」に屈曲し、肩部外面は横位のヘラケズで調整される。覆土中から出土した2は、いわゆる北武藏型坏で、口径が大きく、口縁部は緩く外傾し、外面は口縁部と底部の間に最終調整の無調整帯が残る。時期 カマド内の出土遺物

から8世紀前半と推定する。

#### H-3号住居跡 (Fig.16, PL. 3)

位置 X 129・130、Y 164・165 主軸方向 E - 4° - N 規模 東西軸 3.84 m・南北軸 4.01 m・深さ 0.47 m 面積 13.36 m<sup>2</sup> 覆土 As-C を含む。床面 直床。堅穴部の大半をW-4に破壊されるため詳細は不明だが、硬化面は観察できない。重複 W-4、1号谷と重複。新旧関係は本遺構→W-4→1号谷。カマド 東壁の南寄りで確認。西半はW-4に破壊されるため詳細は不明。構築材や崩落土も不明瞭。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 北西部を除いて確認できるが、不規則で浅い。掘り方 なし。底面はX層。出土遺物 なし。時期 重複関係から8世紀以前と推定する。

#### (2) 溝跡

##### W-1号溝跡 (Fig.16)

位置 X 134・135、Y 164・165 主軸方向 N - 13° - W 規模 長さ (6.16) m・上幅 1.52 m・下幅 0.48 m・深さ 0.92 m 形状等 北西・南東に走向する。断面緩い弧状。南東へわずかに勾配が下り、南西部に浅い窪地を形成する。重複 D-1と重複。新旧関係は本遺構→D-1。覆土 上層はAs-Bを含む。以下の覆土はHr-FAやAs-Cを含む。出土遺物 覆土中から土師器・須恵器の壺・甕や陶器が出土したが、細片のため詳細不明。時期 As-B混入土層の堆積層位から、12世紀以前と推定する。

##### W-2号溝跡 (Fig.16)

位置 X 132・133、Y 164・165 主軸方向 N - 38° - W 規模 長さ (8.08) m・上幅 0.83 m・下幅 0.41 m・深さ 0.82 m 形状等 北西・南東に走向する。断面U字状。南東へ勾配が下る。重複 W-5、1号谷と重複。新旧関係はW-5→1号谷→本遺構。覆土 As-Bを含む。出土遺物 覆土中から土師器の壺・甕や瓦が少量出土したが、細片のため詳細不明。時期 覆土にAs-Bを含むことから12世紀以降と推定する。

##### W-3号溝跡 (Fig.17, PL. 3)

位置 X 129・130、Y 164・165 主軸方向 N - 32° - W 規模 長さ (7.34) m・上幅 1.22 m・下幅 0.73 m・深さ 0.51 m 形状等 北西・南東に走向する。断面緩い弧状。南東へわずかに勾配が下る。重複 H-2、W-4、1号谷と重複。新旧関係はH-2→W-4→1号谷→本遺構。覆土 As-Bを含む。出土遺物 覆土中から土師器・須恵器の壺・甕や瓦が出土したが、細片のため詳細不明。成体のウマの骨が、覆土中層から散乱した状態で出土した。時期 覆土にAs-Bを含むことから12世紀以降と推定する。

##### W-4号溝跡 (Fig.18・20, PL. 3・5)

位置 X 128～130、Y 164～165 主軸方向 E - 16° - N 規模 長さ (11.01) m・上幅 2.40 m・下幅 0.30 m・深さ 1.05 m 形状等 北東・南西に走向する。断面逆台形状。底面は東端部と南端部にわずかな段差があるが、全体的に明確な勾配差は観察できない。重複 H-2・3、W-3、P-4、1号谷と重複。新旧関係は(倒木痕→)H-2・3→本遺構→1号谷→W-3。P-4と本遺構の新旧関係は不明。覆土 1～5層は1号谷の覆土で、本遺構を被覆する。上層の7～9層は蒼海(117) W-2の8～13層に相当し、土質は粒度がやや細かい。中層の10層は蒼海(117) W-2の14層に相当し、総社砂層のブロックを多く含み、埋め戻し土と判断できる。蒼海(117) W-2の相当層では硬化面が確認できたが、平面的にはスポット状の硬化面として形成されており、本遺構SPAでは確認できなかった。12・14層は7～9層に類似する。以下最下層まで、総社砂層の粒子を多く含む黄褐色系の土と、これにブロック状の総社砂層を多く含む土が互層に堆積し、やや短期間の埋め戻し土と判断できる。薬理構造や砂層の堆積など流水の痕跡は観察できない。出土遺物 覆土中から土師器の壺・甕や須恵器の壺・甕・壺が出土したが、いずれも細片であり、出土位置を考えると、重複するH-2・3から流入した資料の可能性がある。1はいわゆる北武藏型壺で、口縁部は直立する。時期 重複関係から8世紀中葉～9世紀と推測する。備考 本遺構は、連続的に調査を行った蒼海(117) W-2と同一の溝跡。東側

には土橋状の掘り残し部を挟み W - 5 が続き、合わせた総延長は 23.20 m を測る。また蒼海 (117) W - 3 は、重複と位置関係から本遺構に付属する小溝と推測できる。

#### W-5号溝跡 (Fig.18・20, PL. 4・5)

位置 X 132 ~ 133, Y 164 主軸方向 E - 16° - N 規模 長さ (4.56) m・上幅 (2.33) m・下幅 (0.29) m・深さ 1.48 m 形状等 北東 - 南西に向向する。大半は調査区外のため詳細不明だが、一連の遺構と判断できる W - 4 を参照するに、断面逆台形状と推定できる。重複 W - 2、1号谷と重複。新旧関係は本遺構→1号谷→W - 2。覆土 1 ~ 3 層は 1 号谷の覆土で、本遺構を被覆する。上層の 4 層は W - 4 の 7 層に相当し、土質は粒度がやや細かい。中層の 6 層は W - 4 の 10 層に相当し、総社砂層のブロックを多く含み、埋め戻し土と判断できる。蒼海 (117) W - 2 の相当層では硬化面が確認できたが、平面的にはスポット状の硬化面として形成されており、本遺構 SPA では確認できなかった。7・8 層は W - 4 の 2・14 層に相当する。9・11・12 層は W - 4 の下層部分に相当し、総社砂層の粒子を多く含む黄褐色系の土と、これにブロック状の総社砂層を多く含む土が互層に堆積し、やや短期間の埋め戻し土と判断できる。葉理構造や砂層の堆積など流水の痕跡は観察できない。出土遺物 覆土中から土器部の壺・甕がわずかに出土したが、いずれも細片のため詳細不明。1 の刀子は覆土上層から出土した。時期 重複関係と W - 4 の所見から、8世紀中葉～9世紀と推定する。備考 本遺構と W - 4 の間の土橋状の掘り残し部において面的な精査を行ったが、硬化面やピット群など、関連する遺構は確認できなかった。

#### W-6号溝跡 (Fig.17・21, PL. 4・5)

位置 X 147, Y 164・165 主軸方向 N - 5° - E 規模 長さ (3.40) m・上幅 1.71 m・下幅 0.92 m・深さ 0.68 m 形状等 南北に走向する。断面逆台形状。底面に明確な勾配差は観察できない。重複 D - 8 と重複。新旧関係は本遺構→D - 8。覆土 新旧 2段階の堆積に大別でき、再掘削を伴うと判断できる。1 ~ 4 層は新段階の覆土で、総社砂層ブロックをやや多く含み、7世紀後半の土器をやや多く包含する。5・6 層は古段階の覆土で、最下部には部分的に 6 層の砂礫層が堆積する。出土遺物 新段階の中～下層から、土器部壺と須恵器甕が破損して散乱した状態で出土した。1 ~ 3 層は、いわゆる北武藏型壺で、口縁部は強く内屈する。2・3 の胎土には、風化して金色の光沢を帯びた黒雲母の微細粒が目立ち、藤岡産の可能性がある。4 ~ 6 层は中型の甕で、5 はわずかに胎土に結晶片岩の細片を含み、藤岡産の可能性がある。出土状況と層位、遺物の型式的な共時性から、図示した遺物は一括性が高いと判断できる。時期 堆積状況と出土遺物から、7世紀中葉～8世紀以前と推定する。

#### (3) 土坑、ピット (Fig.19)

D - 3 は、形状・規模から土坑墓の可能性があるが、人骨は出土しなかった。D - 6・7・9 は、南北軸に連なる土坑群で、確認面が適切ではないため詳細不明だが、D - 9 の断面観察によれば、本来はある程度の深さがあり、As-B を非常に多く含む。東側の調査区外には蒼海城の堀跡が同軸で走向しており、関連する土坑群の可能性もある。P - 4 は W - 4 と重複するが、前後関係は判断できなかった。

なお、各遺構の計測値については、Tab. 3 に示す。

Tab. 3 元総社蒼海遺跡群 (121) 土坑、ピット計測表

遺構名	位 置	長軸	短軸	深さ	平面形状	主な遺物	約用	備 考
D - 2	X 136 Y 166	0.67	0.62	0.11	不規則形	—	中世II期 As-B を含む。	
D - 2	X 135 Y 166	0.90	0.54	0.07	円形	—	中世II期 As-B を含む。	
D - 3	X 135 Y 166	1.20	0.58	0.27	圓角直方形	—	中世II期 As-B を含む。	
D - 4	X 135 Y 166	0.67	0.29	0.21	円形	—	中世II期 As-B を含む。	
D - 5	X 135 Y 166	0.81	0.36	0.18	圓角直方形	—	中世II期 As-B を含まない。	
D - 6	X 135 Y 166	1.00	0.68	0.06	圓角直方形	—	中世II期 As-B を含む。	
D - 7	X 136 Y 166 - 165	1.00	0.72	0.05	圓角直方形	—	中世II期 As-B を含む。 D41.1.退化した。	
D - 8	X 145 Y 165	1.45	0.65	0.25	1.28	1.09	0.25	中世II期 As-B を含む。
D - 9	X 145 Y 165	—	—	0.77	—	—	—	中世II期 As-B を含む。
P - 1	X 145 Y 165	1.47	0.39	0.29	0.11	円形	—	中世II期 As-B を含む。
P - 2	X 145 Y 165	0.58	0.28	0.10	円形	—	—	中世II期 As-B を含む。
P - 3	X 145 Y 165	0.85	0.26	0.07	円形	—	—	中世II期 As-B を含む。
P - 4	X 145 Y 165	0.25	0.23	0.36	円形	—	—	中世II期 As-B を含む。 As-C を含む。

#### (4) 土坑墓

##### DB-1号土坑墓 (Fig.19・20, PL. 4・5)

位置 X 164, Y 146・147 主軸方向 (N - 4° - W) 規模 東西軸 0.56 m・南北軸 1.60 m・深さ 0.52 m  
形状 長方形。底面は弱い起伏がある。 覆土 土層の堆積状況から、1・4・6層は棺内の埋没土、5・7層は墓坑の埋め戻し土、8層は棺床の整地土と考えることができ、木棺直葬の可能性がある。 重複 本遺構の東側にはIV層土の落ち込みが観察でき、遺構として把握できなかったが、D-6・7・9に連なる土坑群の1基が重複していた可能性が高い。 出土遺物 被葬者は成人女性と鑑定された。北頭位の仰臥伸展葬で埋葬される。土層断面から木棺の存在を推定できるが、鉄釘は出土しなった。遺物は、須恵器の塊と小皿が2点ずつ出土した。IV層土の落ち込みによる攪拌を受けて破損しているが、残存率は高いので、本遺構に伴う遺物と判断できる。1・2の塊は酸化焰焼成で高台が高い。3の小皿は底径が大きく、やや深身。ただし4の小皿は対照的で、底径是非常に小さく、浅身。 時期 出土遺物から10世紀後半と推定する。

#### (5) 埋没谷

##### 1号谷 (Fig.18・21, PL. 5)

位置 X 128～133, Y 163～165 主軸方向 E - 16° - N 規模 長さ (17.29) m・幅 8.50～5.23 m・深さ 0.48 m 形状等 東北-南西に向かう。断面緩い弧状。 重複 H-2・3・W-2～5, P-4と重複。 新旧関係は(倒木痕→)H-2・3→W-4・5 (・P-4)→本遺構→W-2・3。 覆土 Hr-FA や As-C を含み、土質は粒度が細かい。中層のW-4・1号谷SPA 2・3層はしまりの強い薄層で、平面的にはスポット状の硬化面として観察できた。 出土遺物 底面直上～覆土最下層から獸骨が散乱した状態で出土し、下顎骨は成体のウシと鑑定された。覆土中には10世紀代の土器片がやや多く、土師器、須恵器の碗、壺などの細片を含む。1の塊は高台の作りが粗い。2は角閃石安山岩の棒状円錐で、部分的に強く摩滅しており、研磨具としての使用が推定できる。 時期 覆土中に含まれる遺物と重複関係から、10世紀と推定する。 備考 本遺構は、連續的に調査を行った蒼海(117)1号谷と同一の埋没谷。総延長は25.10 mを測る。W-4・5の上部に沿って形成されており、両溝の埋没過程に生じた谷地形と判断できる。明確な痕跡としては残存しないものの、蒼海(118)V層は本遺構に間連する包含層と判断できる。

#### (6) 遺構外出土遺物

遺構外から際立った遺物の出土はない。1は縄文時代前期後葉の諸磯式。2は頁岩製の無茎錐。3の鉄釘は表土中から出土した。

## VI 自然科学分析

大妻女子大学博物館 横崎 修一郎

#### (1) 元總社蒼海遺跡群(121) DB-1号土坑墓出土古代人骨

はじめに 元總社蒼海遺跡群(121)は、前橋市元總社町に所在する。前橋市教育委員会による発掘調査が、2016(平成28)年7月から同年8月まで行われた。発掘調査の実務は、技研コンサル株式会社が担当している。本遺跡群のDB-1号土坑墓より、古代の人骨が出土したので以下に報告する。人骨の時期は、出土土器より10世紀後半に比定されている。なお、人骨の保存状態が悪いため、計測できた人骨はなかった。

1. 人骨の出土状況 人骨は、長軸(南北)約160 cm・短軸(東西)約55 cm前後・深さ約50 cm前後の長方形土坑から出土している。なお、頭蓋骨は調査区外の北部から検出されている。
2. 人骨の出土部位 人骨の残存状態は悪く、頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。なお、歯は検出されなかっ

た。

3. 副葬品 副葬品は、須恵器壺2点・須恵器小皿2点が検出されている。

4. 被葬者の頭位・埋葬状態 出土人骨の残存状態は非常に悪いが、頭蓋骨の出土位置から、頭位は北であると推定される。四肢骨片も交叉するのではない状態であるため、仰臥伸展葬であると推定される。前橋市周辺の古代人骨は、仰臥伸展葬が特徴である。

5. 被葬者の個体数 出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

6. 被葬者の性別 頭蓋骨の厚さは、比較的薄く女性的である。人骨の出土状況からは、被葬者の身長は約145cm程度と推定される。残念ながら、古代人骨の身長に関するまとまったデータは無いが、中世人骨の場合、鎌倉時代人骨は、男性が平均159cm[153cm~167cm]・同女性が平均145cm[140cm~149cm]であり、室町時代人骨は、男性が平均157cm[149cm~166cm]・同女性が平均147cm[138cm~153cm]である(平本 1972)。総合的に、被葬者の性別は女性であると推定される。

7. 被葬者の死亡年齢 出土人骨の残存状況が悪いため、死亡年齢推定の指標となる部位が検出されていない。しかしながら、恐らく、成人であると推定される。このことは、推定身長からも裏付けられる。

まとめ 元総社蒼海遺跡群(121)のDB-1号土坑墓から、10世紀後半代の古代人骨1体が出土した。被葬者は、成人女性で、仰臥伸展葬で埋葬されたと推定された。

#### 引用文献

平本嘉助 1972 「繩文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化」『人類学雑誌』、80:221-236

#### (2) 元総社蒼海遺跡群(121)出土獸骨

はじめに 元総社蒼海遺跡群(121)は、前橋市元総社町に所在する。前橋市教育委員会による発掘調査が、2016(平成28)年7月から同年8月まで行われた。発掘調査の実務は、技研コンサル株式会社が担当している。本遺跡群の溝と埋没谷より、獸骨が出土したので以下に報告する。

1. W-3号溝跡出土獸骨 獣骨の時期は、溝であるため特定は困難であるが、溝からAs-B(浅間山降下B軽石)が検出されており、時期は天仁元年(1108年)と考えられているため、中世以後に比定されている。ただ、1号谷からの混入の可能性もあるという。確実に同定できた部位は、右橈骨尺骨(No.1)と左上腕骨(No.2)である。いずれも、成体のウマ(馬)である。

2. 1号谷出土獸骨 獣骨の時期は、埋没谷であるため特定は困難であるが、遺構の重複関係と出土遺物から、10世紀代に比定されている。確実に同定できた部位は、下顎骨右及び下顎歯である(No.1)。これは、成体のウシ(牛)である。

まとめ 元総社蒼海遺跡群(121)のW-3号溝跡・1号谷から、獸骨が出土した。中世以降のW-3号溝跡からは、ウマ(馬)の四肢骨が出土した。中でも、右橈骨尺骨及び左上腕骨が同定できた。古代の1号谷からは、ウシ(牛)の下顎骨右及び下顎歯が出土した。



Fig.6 DB-1号土坑墓人骨出土状況(南から)



Fig.7 W-3号溝跡出土馬骨：No.1・右腕骨尺骨後面觀



Fig.8 W-3号溝跡出土馬骨：No.2・左上腕骨前面觀

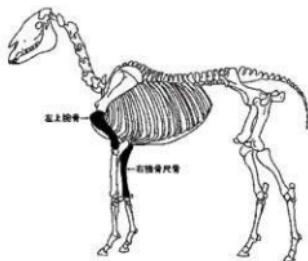


Fig.9 W-3号溝跡出土馬骨出土部位圖  
[young (1950) を改変]

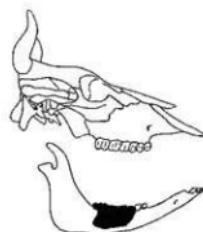


Fig.10 W-4号溝跡出土ウシ（牛）出土部位圖  
[樽野（1986）を改変]

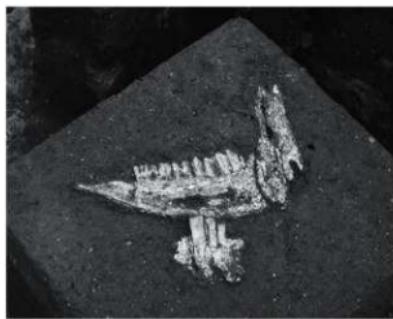


Fig.11 W-4号溝跡獸骨出土狀況

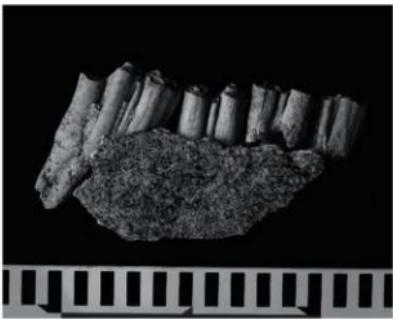


Fig.12 W-4号溝跡出土ウシ（牛）右下顎骨

#### 引用文献

樽野博幸 1986 『けものの歴』、大阪市立自然史博物館

YOUNG, J.Z. 1950 "The Life of Vertebrates", Oxford University Press

H-1

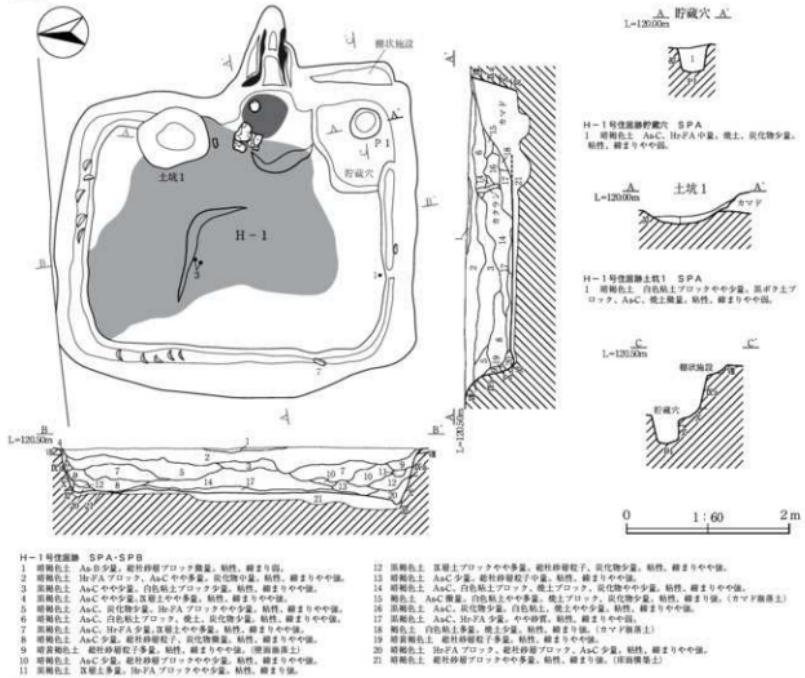
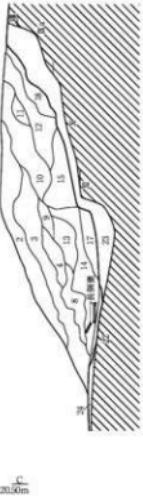
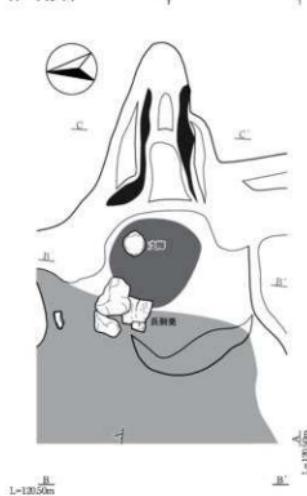
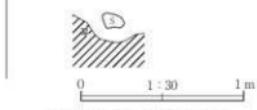
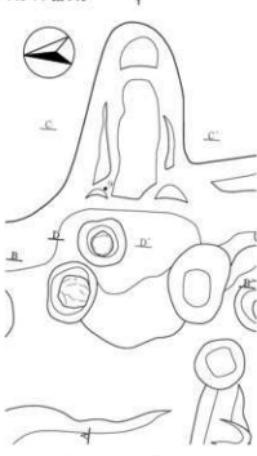


Fig.13 H-1号住居跡

H-1カマド



H-1カマド掘り方



H-2

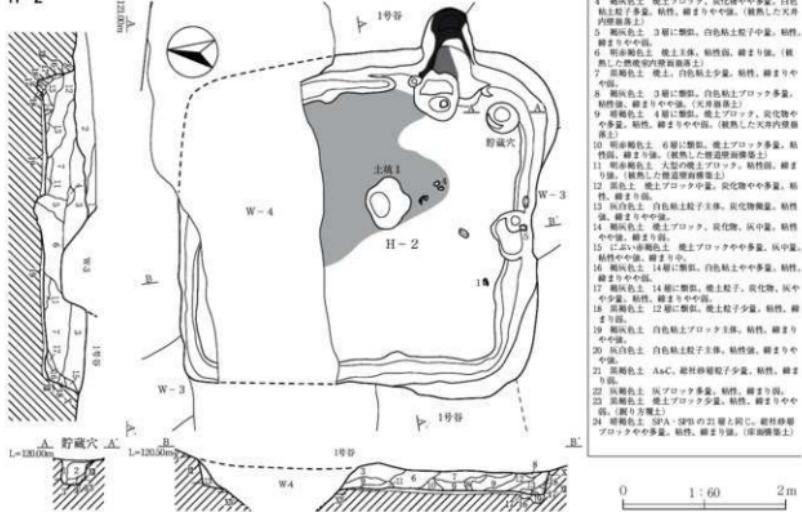
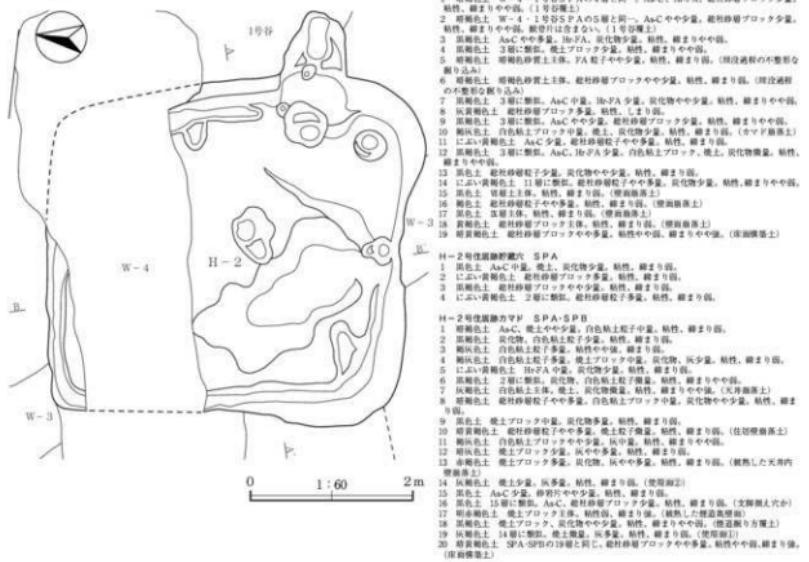


Fig.14 H-1号住居跡②、H-2号住居跡①

### H-2号掘り方



### H-2号カマド

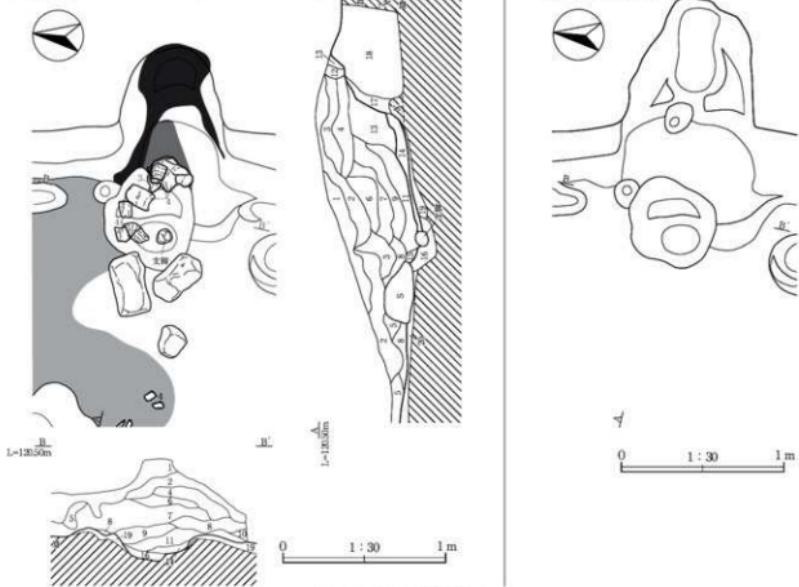
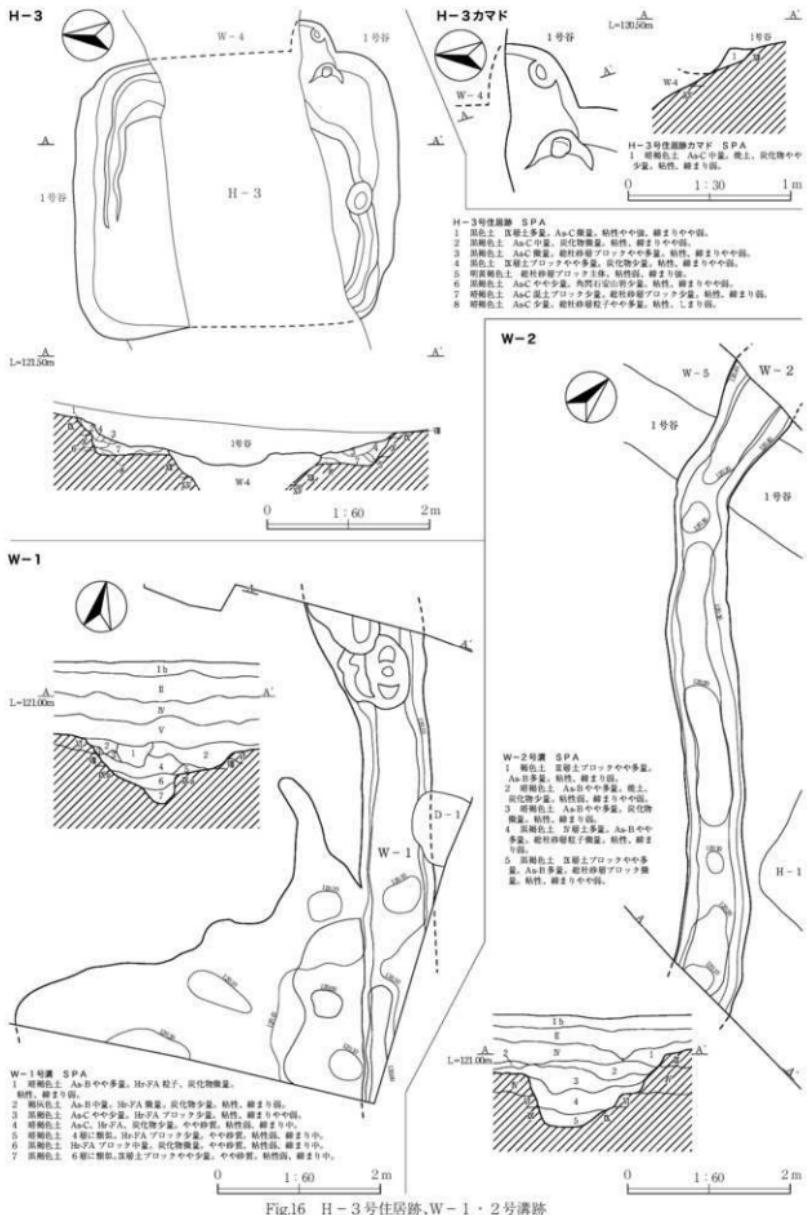


Fig.15 H-2号住居跡②



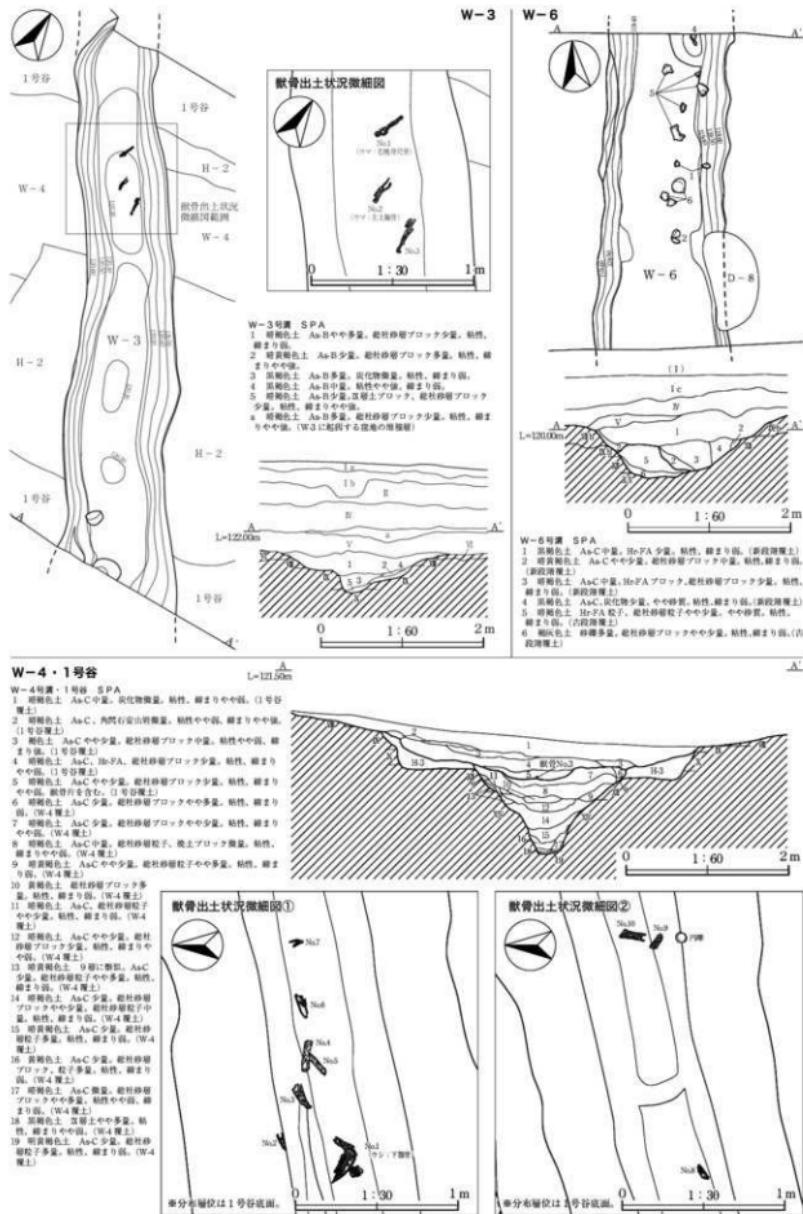


Fig.17 W-3·4·6号溝跡、1号谷

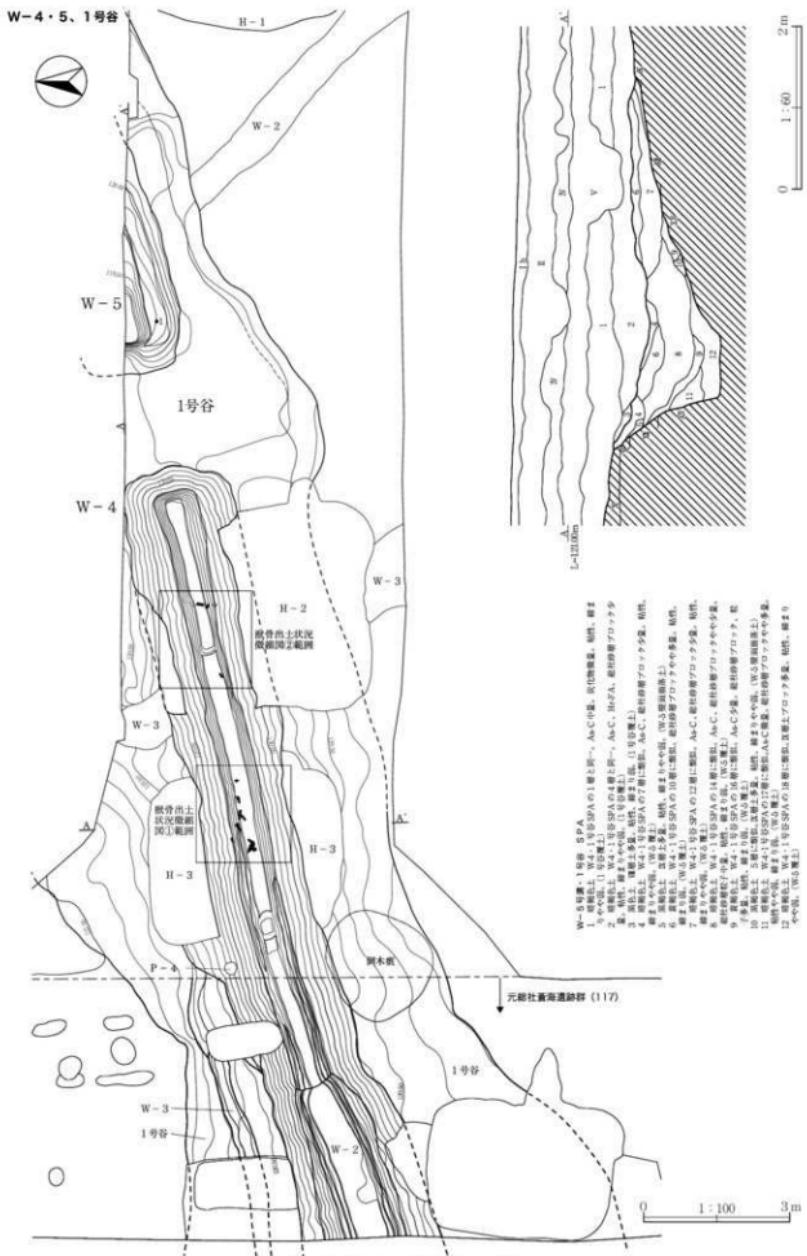


Fig.18 W-4・5号溝跡、1号谷

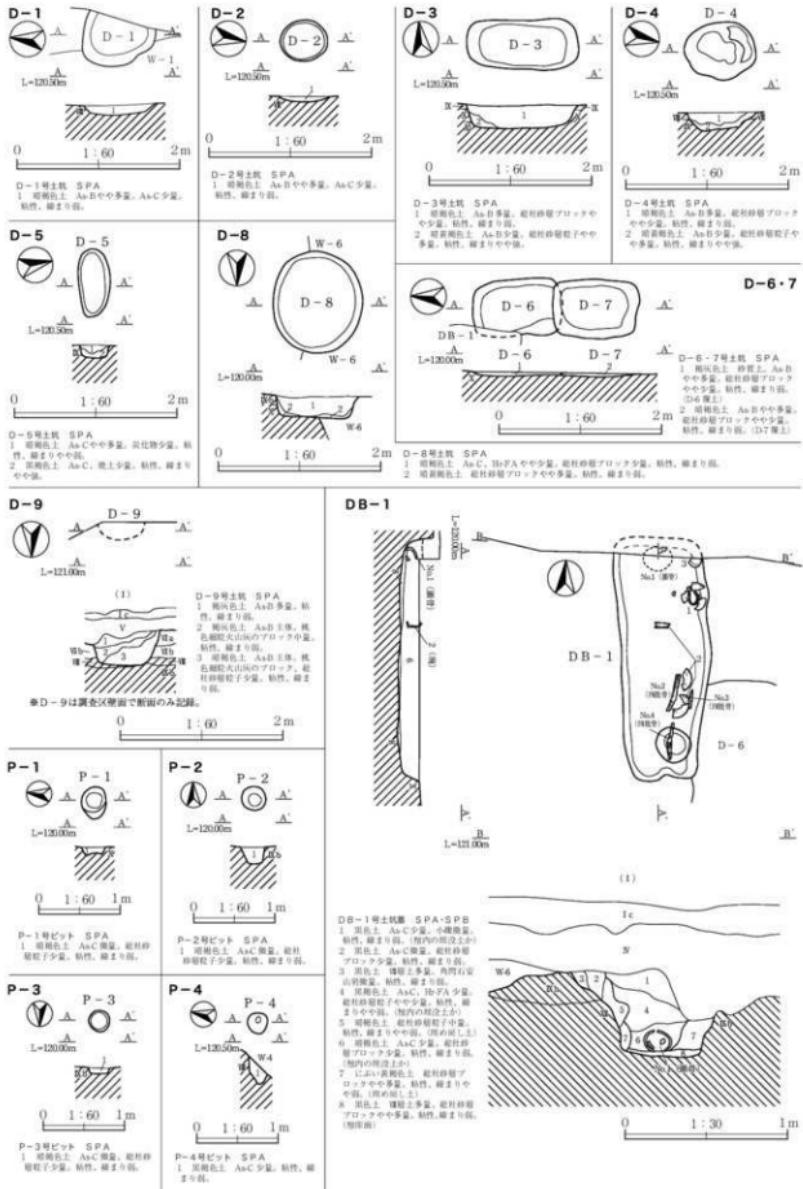


Fig.19 土坑、土坑墓、ピット

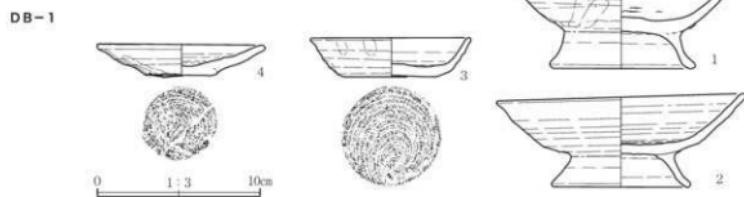
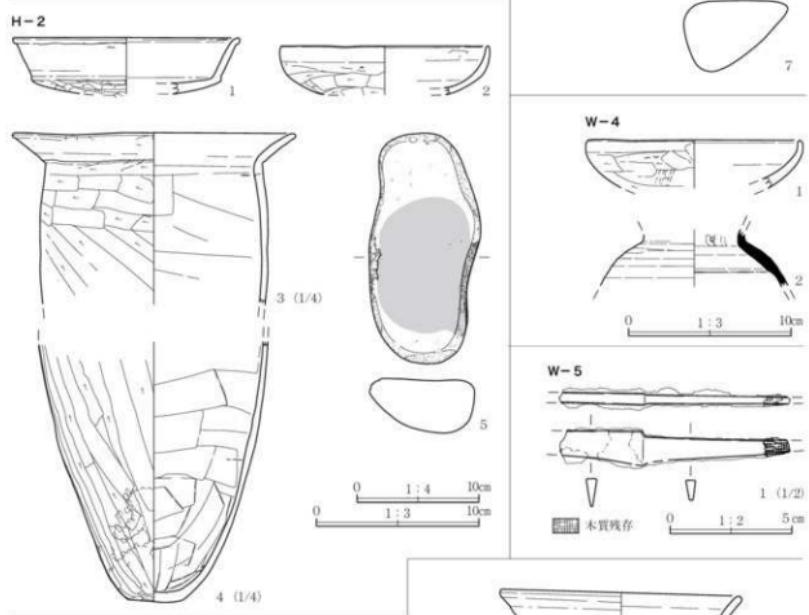
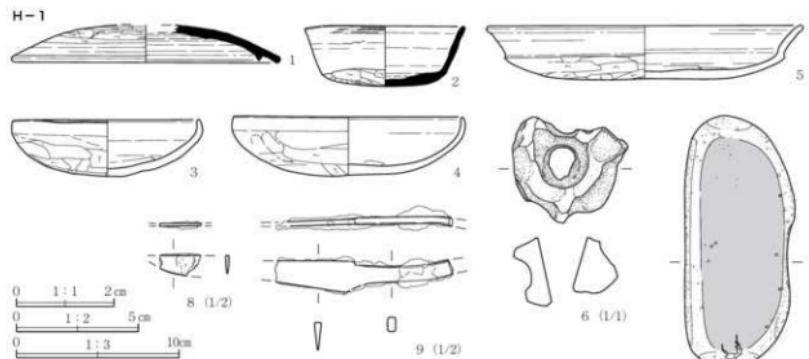


Fig.20 H-1・2号住居跡、W-4・5号溝跡、DB-1号土坑墓出土遺物

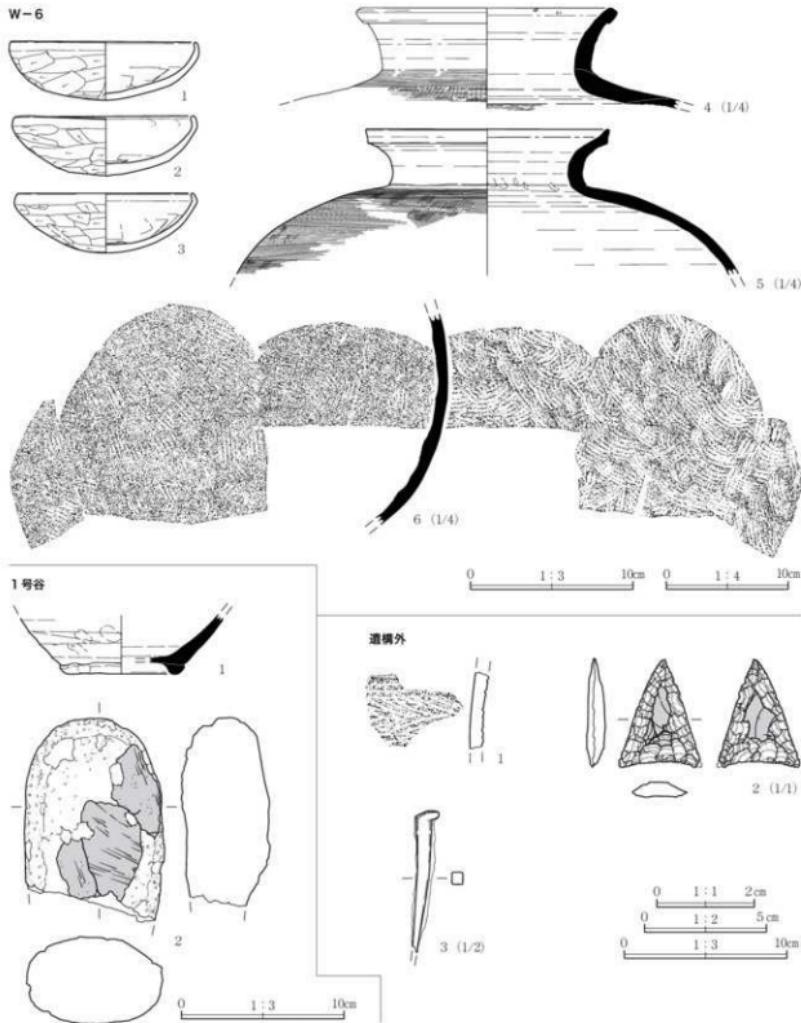


Fig.21 W-6号溝跡、1号谷、造構外出土遺物

Tab. 4 出土遺物観察表

H-1

NO.	三次分類	種類・断面	口径	底径	高さ	胎土	焼成	表面	断面	形状・底・断面・文様等の特徴	焼成状況・調査
1	No.3	切妻口 灰陶	16.03	—	2.21	白・黑色胎	燒成	内面・外面	U字口付・縦目録・横目録・斜目録・輪目録等々。	5.4周作。	5.5周作。
2	裏土	圓筒形 瓦	9.8	7.6	3.7	黃色・白・黑 色胎	燒成	内面	口縁部に浅い輪目録等。	1.4周作。	1.4周作。
3	No.12	土器等 灰	11.4	—	3.5	角閃石・石 英石・白・黑 色胎	燒成	内面・外面	エビナギ→底部中位以下ハラカゼリ。口縁部等 内面・底部スピナギ→底部上半→口縁部カコナギ。	4.5周作。	4.5周作。

No	出土位置	種別	形態	大きさ	幅	厚さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
4	廻上 土器部 裏面	土器部 裏面	(14.0)	~	37	内:円筒、外: 不規則 内:褐色 外:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
5	廻上 土器部 裏面	土器部 裏面	(19.0)	~	33	内:晶石片、外: 不規則 内:褐色 外:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色
No	出土位置	種別	形態	大きさ	幅	厚さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
6	廻上 日葉石器 裏面	土器部 裏面	(22)	(24)	(16)	直置灰陶	~	12.5 に高い橙色	3kg	片葉状の小孔多數。空洞断然跡。	破片。
7	廻上 石器部 裏面	土器部 裏面	15.5	6.8	47	安山岩	~	暗オーライト 色	254g	直置灰陶。	空孔。 側面凹溝。
8	廻上 鉄製品 刀子	鉄製品 刀子	(25)	1.4	0.2	直	~	~	1.7g	~	破片。
9	廻上 鉄製品 刀子	鉄製品 刀子	(7.0)	1.4	0.6	直	~	~	64g	~	底部外観 オマツ脱り方。

## H - 2

No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考	
1	No.7	土器部 裏面	(13.8)	~	(35)	内:円筒、外: 不規則 内:褐色 外:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	
2	廻上 土器部 裏面	土器部 裏面	(12.6)	~	(21)	直筒型、内: 不規則 外:褐色	直筒	内:白、外: 不規則 内:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	
3	No.12	土器部 裏面	(23.0)	~	(14.3)	直筒型、内: 不規則 外:褐色	直筒	白	白	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	
4	No.12	土器部 裏面	~	4.5	(21.1)	直筒型、内: 不規則 外:褐色	直筒	白	白	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	
No	出土位置	種別	形態	大きさ	幅	厚さ	地土	構成	色調	重量	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
5	No.6	石製品 斧	14.2	6.9	3.8	短若	~	綠灰岩	4200g	單面鋸齒、側面打刃。	空孔。 正面斜上。	

## W - 4

No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	廻上 土器部 裏面	土器部 裏面	(11.0)	~	(28)	内:円筒、外: 不規則 内:褐色 外:褐色	直筒	内:白、外: 不規則 内:褐色	内:白、外: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
2	廻上 土器部 裏面	土器部 裏面	~	~	(4.6)	直筒	褐色	黃灰岩	~	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色

## W - 5

No	出土位置	種別	形態	大きさ	幅	厚さ	地土	構成	色調	重量	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.1	鉄製品 刀子	(8.4)	1.6	0.5	直	~	~	~	15.2g	単面鋸齒。	鐵頭打刃。

## W - 6

No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.2.8	土器部 裏面	11.3	~	26	内:円筒、外: 不規則 内:褐色 外:褐色	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
2	No.12	土器部 裏面	11.0	~	27	直筒型、内: 不規則 外:褐色	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
3	廻上 土器部 裏面	土器部 裏面	10.8	~	27	直筒型、内: 不規則 外:褐色	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
4	No.1	鉄製品 刀子	(20.5)	~	(8.0)	黄石、チャーチ 石、赤玉	塑型	白、灰 内:褐色 外:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
5	No.3 - 6	田器部 裏面	(19.9)	~	(12.0)	砾石型、 チャーチ 石、白、赤玉	砾石	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
6	No.9 - 11	土器部 裏面	~	~	(15.6)	黄石、白、赤玉	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色

## DB - 1

No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考
1	No.2	刃物 切削工具	14.7	8.6	6.6	内:円筒、外: 不規則 内:褐色 外:褐色	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
2	No.3 - 5	追跡石 追跡石	15.1	8.4	5.7	内:円筒、外: 不規則 内:褐色	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
3	No.1	追跡石 小皿	9.2	5.8	2.4	内:円筒、外: 不規則 内:褐色	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色
4	廻上	追跡石 小皿	10.2	4.4	2.1	砾石、白、赤玉	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色

## 1号谷

No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考	
1	廻上 追跡石	追跡石 追跡石	~	(6.9)	(3.6)	果実母、白、赤玉	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	
No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考	
2	廻上 追跡石 追跡石	追跡石 追跡石	~	(12.6)	8.6	1.5	内:円筒石山岩	直筒	褐色	381g	外:削られた角向石安山岩の内側。一部分が落葉。	廻上土層。
1	廻外	追跡石 追跡石	~	~	(4.5)	砾石、白、赤玉	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	~	~	廻上土層。

## 遺構外

No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	構成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現状状況・備考	
1	廻外	追跡石 追跡石	~	~	(4.5)	砾石、白、赤玉	直筒	褐色	外:白、内: 不規則 内:褐色	~	~	廻上土層。

No	出土位置	種別、断面	長さ	幅	厚さ	材質	形状	底成	色調	重量	形態、底・断面、文様等の特徴	現状状況・備考
2	遺構外 石質跡	22	16	64	内凹	-	瓦面	-	1.3kg	表裏共に素地と丁寧な手仕事による緻密な瓦面。裏面は瓦面に中空材が含まない。	直線的 略定存。	
3	出土 瓦質瓦	(58)	65	65	直	-	-	-	0.8kg	-	-	端部欠損。

## VII 発掘調査の成果と課題

今回の調査地点は、上野国府城の推定域内に位置し、御靈神社が鎮座する谷を挟み東側の微高地には、一連の国府推定地を間近に望むことができる。その政治史的な地勢を反映するようにして見つかったW-4~6は、過去の周辺調査例に連なるもので、南北300m以上にわたり延々と蒼海遺跡群の台地を継ぐ。この台地上は総社砂層と呼ばれる硬質の砂層が厚く堆積する地帯で、長大な溝の開削には、この遺構の発掘調査に労力を費した。また、この遺構の開削時期と性格について、周辺調査例を参考しつつ、若干の検討を加えてみたい。

**W-4~6号溝跡と周辺調査例** W-4~6に間接する遺構は、2001年に小見内Ⅲ遺跡で最初に確認され、古代の遺構で2時期に分かれ、道としても利用されたことが指摘された。2003年には小見内Ⅵ遺跡で確認され、小見内Ⅲ遺跡の延長上につながり、9世紀後半の住居跡に壊されることが指摘され、上野国府が存在した頃の区画溝と推定された。2006年には、さらにその延長上の蒼海(1・6)で確認され、一連の遺構と指摘される一方、推定国府や国分尼寺とは走向方向の軸線が異なり、開削は国府造営以前に遡る可能性が問題提起された。2008年には牛池川の崖線に面した蒼海(17)で確認され、古墳時代後期の開削である可能性が指摘された。その後、2016年になり、その推定線上の蒼海(117)と本調査地点で、再びこの長大な溝を確認するに至った。

**新旧関係と走向** 過去の調査で、この遺構は大きく2時期に分かれると指摘された。fig.22には、各調査地点と埋没状況を整理し、1~15の地点番号で示した。14・15では、古段階の埋没過程に新段階が再掘削され、以南の6~11では、古段階の西側に新段階が開削される。さらに南の5に重複ではなく、南西へ斜行し、その延長が1・2・4につながる。5の東側は、蒼海域の堀跡で“擾乱”され不明だが、その南の3は、1・2と住居跡の前後関係から間接的に古段階、1・2が新段階につながると判断できる。推定した古段階の走向は、牛池川の崖線に

Tab. 5 開連溝跡一覧

番号	地名	地名	全長	下限	深さ	断面形状	走向方向	断面化	埋没	形状	底成	開削し	大底	断面形状	出土遺物	規定時間	備考	説明
1	菅原(121)	W-4	0.60	2.10	0.30	185	逆V形	N-S/E	中削	*	*	X	中-下削	Aa+C	Te-縦-1c、往復耕跡-本耕	未定	青海(137)W-2から続	新
2	菅原(121)	W-5	0.50	2.03	0.26	148	逆V形	N-S/E	中削	*	*	X	中-下削	Aa+C	本耕-4c、往復耕跡-埋没	未定	青海(137)W-2から続	新
3	菅原(121)	W-6	0.49	1.71	0.32	66	逆V形	N-S/E	中削	*	F形	*	*	Hr-F	古段階の起削跡-4c、往復耕跡-1c、往復耕跡-1c、往復耕跡-1c	未定	新段(1)、新段(2)	新
4	菅原(121)	W-7	0.30	2.91	0.23	126	逆V形	N-S/E	中削	*	*	X	中-下削	Aa+C	Te-縦-1c、往復耕跡-本耕	未定	青海(121D)から続	新
5	菅原(121)	W-8	0.50	2.20	0.39	113	逆V形	N-S/E	中削	*	*	X	-	Gh-F	本耕-10c、扇-11c、耕作痕なし	未定	青海(121D)から続	新
6	菅原(121)	W-9	0.52	4.15	0.34	136	逆V形	N-S/E	上削	*	*	-	-	Aa+C	青海(12)W-2	未定	複数-土塗跡H、未定	古
7	菅原(121)	W-10	0.58	0.26	0.64	124	逆V形	N-S/E	中削	*	*	X	-	Aa+C	本耕-4c、往復耕跡-4c	-	新段(1)、新段(2)	新
8	菅原(121)	W-11	0.10	2.70	0.72	0.87	逆V形	N-S/W	中削	*	*	X	-	Aa+C	Te-縦-1c、往復耕跡-1c、往復耕跡-1c	未定	青海(121D)から続	新
9	菅原(121)	W-12	0.41	4.00	1.10	120	逆V形	N-S/E	中削	*	*	X	-	Gh-F	本耕-2c、扇-2c、往復耕跡-10c	未定	青海(121D)から続	新
10	小見内Ⅲ遺跡(1)	A-1	0.45	2.10	0.55	405	逆V形	N-S/E	上-中削	*	*	X	-	Gh-F	本耕-2c、扇-2c、往復耕跡-1c、往復耕跡-1c	未定	複数-土塗跡H、未定	古
11	小見内Ⅲ遺跡(1)	A-2	0.23	1.40	0.48	93	逆V形	N-S/E	上-中削	*	*	X	-	Gh-F	本耕-2c、扇-2c、往復耕跡-1c、往復耕跡-1c	未定	複数-土塗跡H、未定	古
12	小見内Ⅲ遺跡(1)	W-5	0.23	1.12	0.44	937	逆V形	N-S/E	上-中削	-	-	-	-	本耕-1c、小見内Ⅲ遺跡W-4	未定	複数-土塗跡H、未定	新	
13	小見内Ⅲ遺跡(1)	W-4	0.07	1.59	0.62	0.31	逆V形	N-S/E	上-中削	-	-	-	-	本耕-1c、小見内Ⅲ遺跡W-4	未定	複数-土塗跡H、未定	新	
14	小見内Ⅲ遺跡(1)	W-3	0.19	4.21	0.55	125	逆V形	N-S/E	上削	下削	1-2	X	-	Aa+C	本耕-4c、往復耕跡-1c、耕作痕-1c、耕作痕-1c	未定	新段(2)の西側部	古・新
15	菅原(121)	W-6	0.72	3.05	0.50	176	sondage	N-S/E	上-中削	*	*	X	-	本耕-4c、往復耕跡-4c、往復耕跡-4c	未定	複数-土塗跡H、未定	古・新	

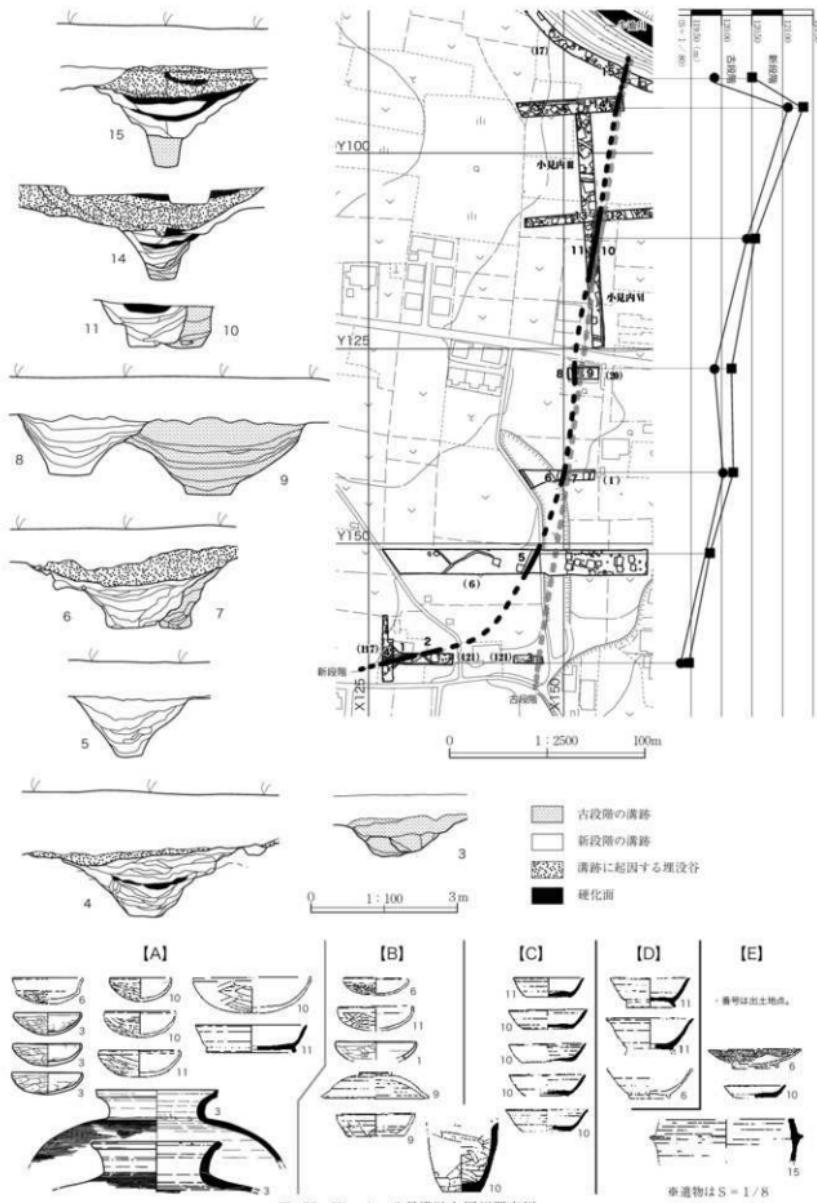


Fig.22 W-4～6号溝跡と周辺調査例

端を発し、北東に8°程度傾きながら直線的に南へ向かう。一方で新段階には、わずかに蛇行しつつ古段階の西側を走向するが、5と6の間で西へ緩やかに屈曲しながら、最終的には北東に74°の走向へ変じて、西へ向かう。

**「区画」か「道路」か「用水」か**　過去の調査で、区画溝の可能性が指摘された。Tab. 5には、各地点の流水を示す要素を抽出したが、葉理構造や砂堆をもつ地点は少なく、流水の洗掘で抉られた痕跡もない。また、fig22右上には底面標高の推移を示した。8・9や15の周辺で標高が安定せず、推移はむしろ旧地形に沿うと推測できる。推定した走向の北端は、牛池川の崖線に接するようだが、元総社北川遺跡で確認された該期の牛池川旧河道を参照すると、河床までは約4mの落差がある。その堆上げには相応の構造物が必要だが、これを示す遺構や堆積は確認されず、低地平野が発達した地形条件を考えても、その性格を用水とみることは難しい。一方、古段階の走向は、旧地形を無視した直進性を示し、従来の指摘どおり区画の性格が推定できる。これをほぼ踏襲する新段階では、1と2の間に土橋状に掘り残され、区画の性格がより強い。また1・4の底面には、開削の単位と判断できる幅と深さの差異が観察でき、開削の計画性と労働力編成の規模を推測できる。道路を示す硬化面は、新段階とその上部にできた谷の埋没過程で部分的に確認できる。つまり、一連の遺構が埋没し区画性が残らぐ中で、細長い谷地状に残された空閑地の土地利用として、変則的な“路地”が生じたと推測できる。

**時期と変遷**　古段階は3で古墳時代の耕起層を壊し、6～15で新段階に壊される。新段階は1・4で8世紀前半の住居跡を壊し、11・13・15で9世紀後半の住居跡に壊される。つまり、重複関係からは大まかに、古段階は古墳時代以降、新段階は8世紀前半以降に開削され、9世紀後半には埋没したことがわかるが、もう少し時期を限定してみる。fig22下段には、出土遺物を時期毎に分けた。覆土出土で一括性は低いが、その傾向を概観すると、まず、DとEの間には時間的な空白があり、上位の埋没谷に起因する可能性がある。最も古いAには、模倣壺や口縁下端まで外面へラケズりがおよぶ武藏型壺が含まれる。Cには、底部回転糸切り後無調整で口径底径比の低い須恵器壺が含まれ、Dは深身の須恵器高台付塊を含む。古段階には、Aが再掘削の覆土中に含まれ、Cまで確認できる。一方、新段階にはDが確認できる。以上の点から、古段階は7世紀中葉～8世紀末、新段階は8世紀末～9世紀中葉の年代観が推定できる。

**小結と展望**　口絵には、同様の手法で時期を判断した溝跡と道路跡を推定古地形に示した。本稿でみた長大な溝は、古段階には一連の国府推定地の西側を南北に直進する。いわゆる「国府方八町説」は現在、国府調査例の増加で再検討が進むが(江口2014)、これを意識しつつ歴史地理学的な手法で推定された上野国府城の復元案(近藤1981、木津1988、川原2011)の、西縁に似た位置を示す点は興味深い。またその開削は、古くても7世紀末を過らないという国府城自体の成立時期(山中1994、大橋2005)に先行し、上野国府の成立時期は不明だが、これに影響を及ぼすような地域開発が、総社古墳群や山王庵寺の造営主体により、地域の社会的な主導権が維持されただろう時期に推定できることは、地域における社会構造の実際を考える上で重要だろう。新段階にその走向は、途中から国府城推定範囲の西側へ逸脱する。この頃には国府も存在していたであろうが、新段階への変更が「おくらがわ」(川原2011)を挟み、国府B案の西側微高地を意識したものか、上野国分尼寺南方の空間を意識したものかはわからない。また、具体的な開削時期は不明だが、蒼海(7・58)などの国府推定地近辺で確認される「大溝」には規模で及ばず、新段階への変更に際しても、旧来の規模と形状が意識されたことに、その性格の差異を見出すことができるだろう。国府推定地周辺の「大溝」は、蒼海(58)の遺物出土状況をみると、10世紀代には機能を維持しているが、本稿で検討した一連の遺構は、この頃には役目を終えて路地や宅地へ変遷する。ちなみに、その区画性が失われた後は、本遺跡W-1や蒼海(118)W-2、小見内IV遺跡W-1・2・5などに確認できる、台地上の微地形によって緩やかな制限を受けつつも、地域の中核を短い道のりでつなぐ、交通の実態にかなった、北西-南東方向の動線に変遷するようで意味深い。この走向を意識した道路は、蒼海城の絵図や陸軍迅速図にも確認できる。さらにその名残りは、現在は確認しにくくなつたものの、区画整理事業以前に撮影された航空写真(国土地理院撮影:CKT74-18 C28-7/27-6)にも、はっきりと見ることができるのである。



西側調査区全景（西から）



東側調査区全景（北西から）



H-1 全景（西から）



H-1 カマド全景（西から）



H-1 構造施設全景（北西から）



H-1 貯藏穴全景（西から）



H-1 カマド周辺部全景（西から）



H-1 カマド掘り方全景（西から）



H-2 全景（北から）



H-2 カマド全景（西から）



H-2貯蔵穴全景（西から）



H-2掘り方全景（北から）



H-2カマド掘り方全景（西から）



H-3全景（西から）



H-3カマド全景（西から）



W-3全景（北西北から）



W-3骸骨No.1～3出土状況（南西から）



W-4全景（北東から）



W-4・5間の遺構検出状況 土積状に地山が残る（南東から）



W-5 全景（南西から）



W-6 遺物出土状況（南から）



DB-1 遺物・人骨出土状況（南西から）



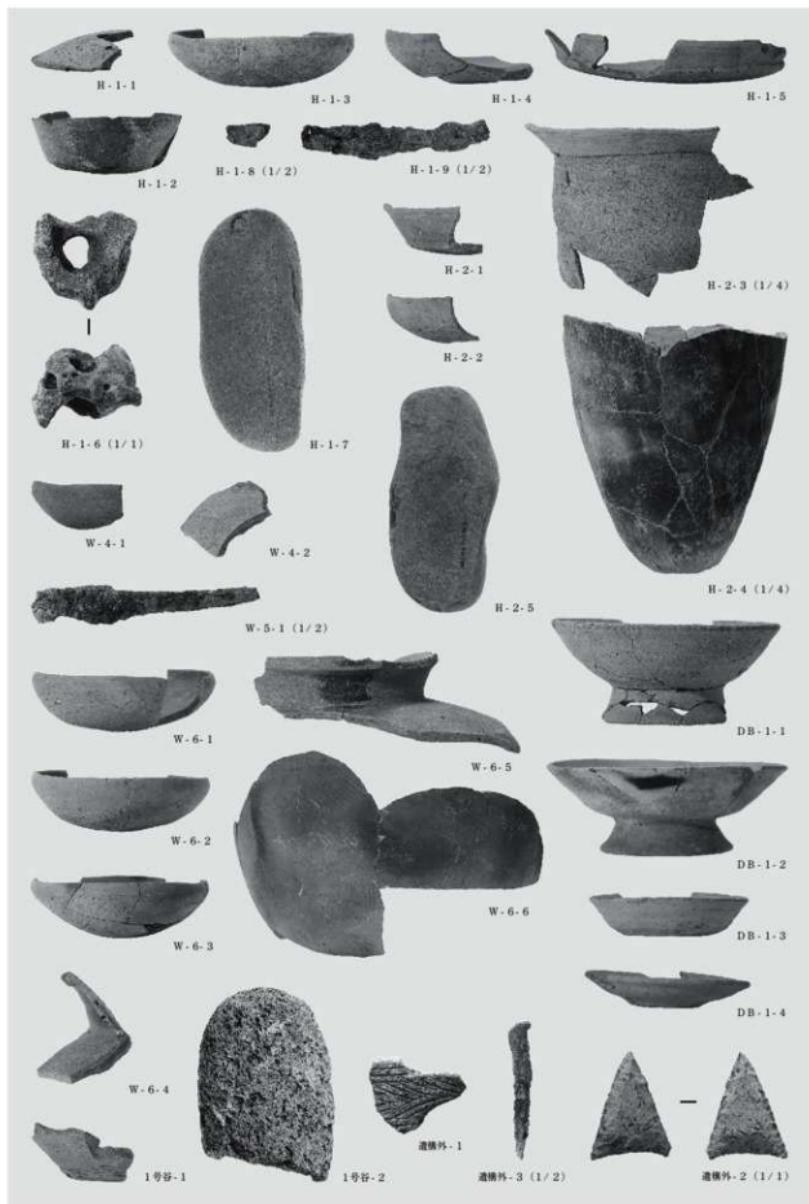
1号谷獸骨No.1～3出土状況（北西から）



1号谷獸骨No.3～7出土状況（南東から）



調査風景（北から）



## 報告書抄録

カタカナ	モトソウジヤオウミイセキダン (121)
書名	元総社蒼海遺跡群 (121)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	小峰 篤・中村信彦
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4
発行年月日	2017年3月24日

フリガナ	フリガナ	コード	位置	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東經	
元総社蒼海遺跡群 (121)	前橋市元総社町 1776-1、1776-2、 1789-2	102021	28A226	36° 23' 28"	139° 1' 53"	20160707 20160826 247m <sup>2</sup> 前橋都市計画事業 元総社蒼海土地区 画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
元総社蒼海遺跡群 (121)	集落	飛鳥時代 奈良時代 平安時代 中～近世	住居跡 溝跡 土坑墓 土坑 ビット 埋没谷	3軒 6条 1基 4基 1箇所	須恵器 (蓋・坏・塊・壺・ 壺) 土師器(坏・長胴壺) 繩文土器 鉄製品(刀子・釘) 石器(石鐵) 石製品(磨石・敲石) 貝果穴痕軟質泥岩	推定上野国府城の西縁付近 で、7世紀中葉～8世紀末 と8世紀末～9世紀中葉の 溝跡2条を確認した。この 溝跡は、周辺調査地点で確 認されている、南北に走向 する長大な区画溝の一部と 推定できる。

### 元総社蒼海遺跡群 (121)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年3月13日 印刷

2017年3月24日 発行

発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4

TEL 027-289-6511

編集 技研コンサル株式会社

印刷 朝日印刷工業株式会社







